

岐阜県ふるさと教育実践集

ふるさとへの誇りと愛着を育む



七和第一北小学校

おタルの飼育

城南中学校 学校林保全活動



加茂農林高校

日本ミツバチの活用

岐阜県教育委員会

平成27年2月発行

岐阜県ふるさと教育実践集

目次

はじめに 2

ふるさと教育の推進 3

Ⅰ 各地区における実践（小中学校、高等学校、特別支援学校）

1 岐阜地区〈瑞穂市立南小学校 岐阜市立長森南中学校 県立岐阜高等学校〉 4

2 西濃地区〈輪之内町立仁木小学校 海津市立城南中学校 県立大垣東高等学校〉 10

3 美濃地区〈郡上市立大和第一北小学校 関市立武儀中学校〉 16

 〈県立中濃特別支援学校〉 16

4 可茂地区〈美濃加茂市立三和小学校 東白川村立東白川中学校〉 22

 〈県立加茂農林高等学校〉 22

5 東濃地区〈中津川市立下野小学校 多治見市立南姫中学校〉 28

6 飛騨地区〈高山市立宮小学校 下呂市立小坂中学校 県立飛騨高山高等学校〉 32

Ⅱ 平成二十六年 岐阜県ふるさと教育表彰について 38

Ⅲ 平成二十六年 ふるさと教育展の様子 39

清流の国ぎふ憲章 42

はじめに

岐阜県は、古くから「飛山濃水」の地と呼ばれてきました。大地をめぐる「清流」を中心に、美しい自然や歴史ある文化が根付いた暮らしの中で、生きる幸せを感じることのできるわたしたち県民にとって大切なふるさとです。

子どもたちにとって、自分が住む地域を知り、ふるさとの自然・歴史・文化に親しむことは、豊かな人間性を育むとともに、社会の一員としての自覚を養い、ふるさと「清流の国ぎふ」の財産を未来に伝えることにつながります。

県教育委員会では、身近な地域の自然・歴史・文化・産業等について学ぶ「ふるさと教育」を推進しているところです。昨年度には、「文化」をテーマに優れた実践事例を紹介しました。今年度は「自然環境」がテーマです。本書に掲載された実践事例は、県内各地で行われている数多くの実践のほんの一部に過ぎませんが、各学校の「ふるさと教育」の充実のために参考になれば幸いです。今後も、「ふるさと教育」を通して、自分たちのふるさとを愛し、地域の課題解決に取り組むとともに、持続可能な地域づくりに貢献する「地域社会人」が育つことを願ってやみません。

最後になりましたが、本実践集の作成に御協力いただきました市町村教育委員会、学校ならびに地域の皆様に心から感謝申し上げます。

平成二十七年二月

岐阜県教育委員会

教育長 松川 禮子

【本美濃紙 コネスコ無形文化遺産登録決定】
「美濃市で漉かれる本美濃紙は、一三〇〇年の歴史があり、今も脈々と伝統が受け継がれています」



「ふるさと教育」の推進 ～「清流の国ぎふ」へ～

「ふるさと教育」とは…

高い志とグローバルな視野をもって夢に挑戦し、家庭・地域・職場で豊かな人間関係を築き、地域社会の一員として考え行動できる「地域社会人」の育成を目指し、地域に根差し地域の特色を生かした教育活動を通して、子どもたちに「ふるさと岐阜」への誇りと愛着を育む教育のことです。

《具体的な取組》

●岐阜県ふるさと教育週間の実施

県内全ての公立幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校では、十一月一日～十四日のうち、実施日と内容を設定して、自分たちが住んでいる地域に関連する学習や、地域に積極的に関わる活動等を公開します。（この期間に実施できない場合には、この時期の前後に公開日を設定します。）

●岐阜県ふるさと教育表彰の実施

県内全ての小・中・高等学校、特別支援学校を対象に、「ふるさと教育」における優れた学校の実践に対して、「優秀賞」「奨励賞」を設け、表彰します。また、応募のあった全ての学校を「ふるさと教育」実践校として認定します。

●岐阜県ふるさと教育展の実施

県内全ての公立幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校で行われている「ふるさと教育」の取組の様子の一部を展示して紹介します。

●ふるさと教育実践集の発行（本書）

県内の小・中・高等学校、特別支援学校における「ふるさと教育」の成果をまとめ、地域の特色を生かした教育についての普及・啓発を図ることを目的に、実践集を作成します。

●岐阜～ふるさとを学ぶ日の実施

十一月三日（文化の日）を「岐阜～ふるさとを学ぶ日」として、県有の四文化施設を無料開放し、文化・芸術を楽しんでいただくとともに、県内各地域の博物館・資料館等六十二施設でも、ふるさとについて学ぶことのできる展示や、体験教室等を企画します。

●「ふるさと教育 水と森に学ぶ」推進事業

「岐阜県ふるさと教育表彰」の「水と森の学習部門」の優秀賞受賞校を推進校に指定し、各校の教育活動を奨励します。

●「清流の国ぎふ」ふるさと体験事業

小中学生を対象に、地域の自然や伝統文化に根差した人々の暮らしを体験する活動を実施します。

瑞穂市立南小学校

総合的な学習の時間

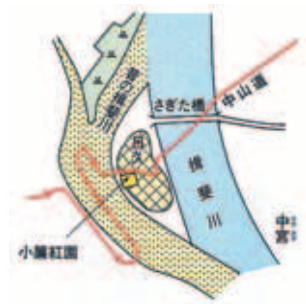
「さぎた」を通して育む
ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

本校は、一級河川が十六本流れる水が豊かな瑞穂市の南西部に位置し、校区にも損斐川や犀川などが流れ、損斐川の西には、鷺田橋でつながれた呂久地区があります。校区の大半が市街化調整区域で宅地化が進み、この十年間で児童数も百五十人以上増加している学校です。

本校は特色ある教育活動として、あいさつ運動等で主体的に活動する児童会、歌声が響く学校、朝の帯時間に反復練習に重きを置いた活動（チャレンスタイム）や「基礎の時間」で



鷺田橋上からの損斐川観察



その後、堤防を越えて河原に入り、様子を確かめた後、河原に落ちているごみを拾ったり、河原の石を採集したりしました。

あまりのごみの多さに児童たちは、「どうして、靴やタイヤ、洗剤、ゴルフボールなんかが川に落ちているんだろう」とか「川の水もきっと汚れてしまっんじゃないかな」と感想をもちました。

学校に帰り、ごみを分別してみるとお菓子の袋やプラスチックトレイ等の家庭ごみの量が最も多く、ごみの総重量（七十二人で三分間収集）は五キログラムになりました。

基礎学力の定着に取り組んでいます。

地域のつながりは強く、自治会としての軽スポーツ大会や夏祭り、地域住民を交えたラジオ体操や運動会等、地域ぐるみで児童を育てていくとする恵まれた地域環境です。

ふるさとの誇りとなる歴史的な史跡も多く、旧中山道沿いの呂久地区には、皇女和宮が降嫁されるときに詠まれた歌「おちていく 身と知りながら もみじ葉の 人なつかしく こがれこそすれ」の史実を記念して「小簾紅園」がつくられています。三年生の総合的な学習の時間において見学します。

また、本校は損斐川を中心とした歴史ある地域にあります。四年生では、地域にちなんだ「さぎた」という名前のふるさと教育（総合的な学習の時間）を実施して、損斐川について学んでいます。

「損斐川探検」②

二度目の「損斐川探検」では、川に生息する水生生物（魚・水生昆虫等）を採取し、生き物を見つけたり、川の水を採取したりしました。

持ち帰った川の水は、水道水、雨水、農業用水、便器にたまっている水、井戸水、プールの水と汚れを比較しました。

汚れは、COD検査、pH検査（水質検査）、チッソ化合物（NOx）の三種のバックテストで比較しました。児童の予想通り、水道水が最もきれいな値を示し、次いで井戸水、三番目にきれいな水は便器の水ということが分かりました。川の水は四番目で予想に反して意外に汚れの数値が高い結果となりました。

結果に対する児童の反応は、「便器の水より川の水の方が汚れていてショック」「河原がこみでいっぱいだったから、水が汚れていても不思議じゃないな」ということで、環境への意識



バックテスト

- 住所／〒501-0322 瑞穂市古橋1660
- 電話／058-328-2202
- メール／sunan@he.mirai.ne.jp
- HP／www.mirai.ne.jp/~sunan/2008/
- 児童数／504名（H26.5.1）
- 学級数／18学級

「損斐川探検」ねらいと願い

四年生では、自分たちが生活する地域を流れる損斐川を実際に探検します。自分の住む町に誇りと愛着がもてるように、損斐川に関わる仕事をされている方にお話を聞いたり、損斐川の環境やそこに住む水生生物を調査したりしています。

生き物や自然環境を調べる活動を通して、損斐川が自分たちの生活と関わっていることや、損斐川の環境保護に尽力している人物の存在、また、そうした人々の保護活動への熱心な思いに気付かせたいという願い



損斐川での水生生物の採取

が高まりました。

また、用水路の水が最も汚れの数値が高く、生活排水が汚れていることを知り、環境への意識をより高めるきっかけとなりました。

中間のまとめとして、二回の損斐川探検と図書室等での調べ学習で分かったことや学んだこと、考えたことを新聞にまとめ、発表会を行いました。

「損斐川探検」から環境保護へ

二期期は環境保護の意識をより高めるために、「河川環境楽園」で様々な視点から損斐川を知る活動を行いました。活動内容は以下の通りです。



調査結果のまとめ（新聞づくり）

「損斐川探検」①

五月三十日、初めての「損斐川探検」で河原の様子、周辺の植生や生き物、川の流れる様子等について、鷺田橋の上から実際に目で見て確かめ、分かったことをまとめました。

があります。

また、「損斐川探検」を通して、環境に関わってもっと調べていこうとする意欲や身近な自然を大切にしたい郷土を愛する心を持ち、今後自分が何ができるかを考え実践する機会をもたせたいと考えています。

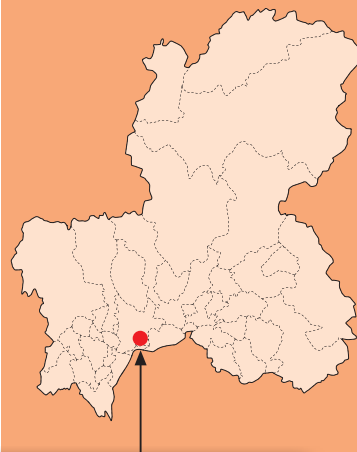


芝生化された運動場と校舎全景

岐阜市立長森南中学校

身近な水環境を通して育む

ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

本校は岐阜市の南東部に位置し、長森南小学校一校区からなっています。南は岐南町、東は各務原市に接し、中山道を挟んで東西に長い地区です。まもなく開校三十周年を迎え、地域の方々は地元の学校・生徒という意識が高く、とても協力的です。



境川での生き物調査

また、学校の周りには田園が広がり、水鳥も多く自然豊かな場所です。中山道の南には境川が流れています。休みの日等近くの境川に釣りに出かけたり、田や用水路で水生生物を捕まえたりする経験を積んでいる生徒も少なくありません。

本校は、十年ほど前から一年生を



水質検査の意味や方法を学ぶ

中心に環境教育に力を入れています。地域のNPO小林由紀子先生をはじめ、関係機関のご支援のもと、水環境の調査を通してふるさとへの愛着をもち、一人一人の生き方を考えるESD（持続可能な開発のための教育）を行っています。

身近な「水」を通して生き方を考え、ふるさとへの愛着をもつ環境学習

自分たちが何気なく口にする水。身近に流れる境川。水に親しんでいる生徒たちに、「無色透明に見える水は、本当にきれいで安全といえるの

だろうか」と投げかけました。

「生き物の体は五十〜七十%が水でできている」という事実を前に、もしも自分たちの身近な水が知らないうちに汚れていたら、人間をはじめ生き物にとって大変なことになると考えたところから学習を始めました。水道水、学校付近の用水路から始まり、長良川の上流である郡上八幡中流である岐阜市の境川、下流の柳津町の水質検査（水生生物調査・pH・COD検査）を行いました。水の汚れ具合や環境を比較調査し、きれいな水がどうして汚れるのかを追究する過程で、私たちの生活様式、



稲穂に囲まれる長森南中学校

ごみ問題等に関心を深め、自己の生き方を見つめるようになってきました。また、現地調査等の体験活動を取り入れ、地域の人や自然と触れ合うことで、地域の一員として、ふるさととの自然に愛着をもって生活する力が育ちつつあります。



どんな水生生物がいるのかな

次に、宿泊研修で訪れた郡上八幡の町で吉田川と町の用水路の水質検査をしました。すると、どちらも水質は良好で、きれいで安全な水であるという結果が得られました。何より、水が冷たくて気持ちいいこと、水の中には魚だけでなく小さな水生昆虫がたくさんいることを発見しました。

生き物と「水」と人の関わり

「身近に流れる境川は生き物にとっですみよい環境なのか」について学びました。河川環境楽園にある自然発見館の指導員の方と川に浮かぶごみについて考えました。この学習を通して次のように考えました。「私たちが普段の生活で使っているプラスチックは何にでも形を変え、とても便利です。でも『少しづついいか』と道ばたや川原に捨ててしまうこともあります。そうやって手を離れると、川や海の生物にとっても危険なものだと分かりました。首にプラスチックのひもがくいこんでいるアザラシやペットボトルのキャップを飲んで死んでいた鳥の写真を見て悲しい気持ちになりました。自分で

は少しくらいと考えず、ごみはごみ箱に捨てたいし、今日学んだことを家の人や地域の人に伝えて、自然に生きる生き物の命を大切にしていきたいです」

地域の一員として持続可能な社会の実現に向けて（ESD）

境川の調査を通して、河川は住宅密集地を通ると汚れが増しますが、湧き水や水辺の生き物によって少しではあるけれど自然に浄化される作用があることを学びました。地域の方にも境川のよさや現状を知ってい



付近の河原で見つかったごみを見て

ただき、ともに愛着ある地域の川として大切にしていけるように働きかけていく活動を行っています。

また、水と同様に、自分たちの生活を見つめ直していくという点で、今後は化石燃料による発電、省エネのための努力について学習します。消費電力の測定やエコカーの試乗等を通して、一人一人の今後の生き方を「持続可能な環境づくり」という視点で考える生徒を育てたいと思います。今後家庭、地域が一体となり、身近な自然を大切にしている活動を続けていきます。



岐阜市アースレンジャー子ども会議にて

川の「水」って気持ちいい 水の中には生き物がいっぱい

学校内で水道水、学校付近の用水路の水の水質検査を行いました。用水を流れる水はCOD濃度が高めであり、飲み水には適さないことが分かりました。

県立岐阜高等学校

守れ！ふるさとの
カスミサンショウウオと
生物多様性



学校・地域の実態

本校は明治六年に仮中学として開校し、今年度で百四十一年の歴史を刻み、卒業生の数も四万三千人を超え、多くの人材を世に送り出してきました。創立百四十年を機に、校舎や体育館の新築、グラウンドの改修等が完了し、全国にも誇ることができ、学習環境が整いました。

地域との関わりにおいては、「太陽の日」と名付けられた学校近隣の清掃活動や岐阜祭への近隣の方々の招待、岐阜盲学校や白杖園（視覚障害のある方の施設）への訪問等のボランティア活動がさかんに行われています。

自然科学部生物班の活動

自然科学部生物班は、岐阜県内に生息する身近な生物を主な研究対象

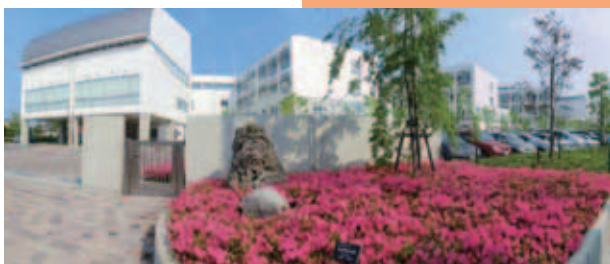
として、一人一人がテーマを持ち、実際にフィールドに出て自分の眼で観察し、調査・研究や実験に励んでいます。また、調査・研究対象の生物の生息環境についても目を向け、生息地の保全についての提言をまとめ、希少生物の保護活動に取り組んでいます。



岐阜市に生息するカスミサンショウウオとその卵のう

カスミサンショウウオの
保護活動への取組

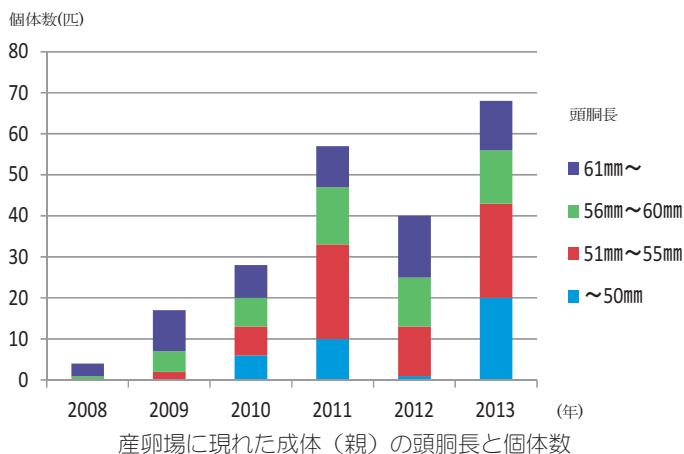
岐阜県には岐阜市と揖斐川町のわずか二か所にのみ、カスミサンショウウオの生育が確認されています。岐阜市の生息地は日本のカスミサンショウウオの分布の東北限にあたり、学術的にも貴重な生息地です。その生息地において、平成十九年（二〇〇七年）の繁殖期の調査では、卵のうち一匹の雌が寒天質に包まれた卵の入った袋状の卵のうを一对生む）が四対しか発見されませんでした。また、翌年の繁殖期には大型の老齢



平成22年に新築された校舎

魚類や昆虫の研究に取り組んでいましたが、カスミサンショウウオの現状を目の当たりにし、部員たちが自ら、「何とかしなければ」と、保護活動に取り組むことになりました。

生息地からすべての卵のうと幼生を岐阜高校に持ち帰り、変態・上陸直前まで飼育し、放流するという活動を平成十九年から開始しました。死亡率が高い幼生時に保護・飼育することで死亡率をできるだけ低く抑えることが目的です。同時に、個体群内の遺伝的多様性等の基礎資料を得るために、ミトコンドリアDNAの塩基配列を岐阜県河川環境研究所（現在の岐阜県水産研究所）や岐阜



大学の設備をお借りして実施することになりました。

右図に示すように、最初の放流から三年後には、頭胴長が五十ミリメートル以下の若齢個体が繁殖に参加していることが確認されました。カスミサンショウウオは三年前後で性成熟するといわれているため、岐阜高校で育て放流されたカスミサンショウウオが野外で生育し、繁殖に参加することが確認でき、部員たちの喜びも格別なものでした。今年度までの八年間で一万四千二百五十四匹を放流し、毎年、五十前後の成体（親）

が産卵場で確認されるようになりました。



カスミサンショウウオのDNA抽出

地域の皆さんの協力

県内のもう一つの生息地である揖斐川町では、個体数は岐阜市ほど危機的な状況ではないですが、生息地がゴミ捨て場と化していました。そこで、地域の皆さんと協力してゴミ拾いや水枯れを防ぐための人工産卵池の設置を行いました。岐阜市の生息地では地域の皆さんや子どもたちを集まっていたいて、カスミサンショウウオの生活史を説明し、放流会を行っています。

保護活動の発展



カスミサンショウウオの放流会

地域の方々のご協力に加えて、この地方の研究機関（岐阜県水産研究所、岐阜大学、世界淡水魚園水族館アqual・トトギス等）や行政の方々（岐阜県自然環境保全課、岐阜市自然環境課等）と生徒たちが協力し、個体数の増加と域外飼育場の建設や公有地への放流を実現させました。さらに、カスミサンショウウオの遺伝子レベルの研究で得たテクニクを生かし、カラドジョウやシベリアイタチ等の外来種の岐阜県への侵入やシロヒレタビラの岐阜県への国内移入の事実を、遺伝子レベルで突き

岐阜から世界へ羽ばたけ！

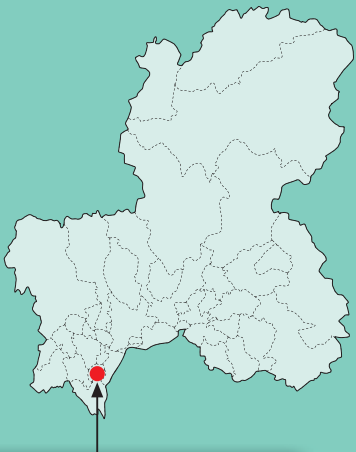
止めることができました。生徒たちの活動は、カスミサンショウウオの保護活動にとどまらず、岐阜県の生物多様性を守る活動へと発展しています。

平成二十二年に生物多様性条約第十回締結国会議（COP10）に合わせて名古屋市で開催された『生物多様性交流フェア』の会場に岐阜高校自然科学部生物班のカスミサンショウウオの保護・研究活動をまとめた英文のパネルが展示され、世界中の多くの方々に私たちの活動を発信することができました。平成十九年に始まったカスミサンショウウオの保護活動は今も後輩に引き継がれています。卒業生の一人は、ドイツに留学し、熱帯雨林を守るための世界的なプロジェクトに参加しています。別の卒業生は、県外の大学院でアユの生態について学び、岐阜に戻り県の研究機関にて、岐阜県の河川に多くのアユが遡上するための研究に従事しています。多くの人材が岐阜から育って、様々な場所で活躍をし、ふるさと岐阜を見守ってくれることを期待しています。

輪之内町立仁木小学校

人や地域とのつながりを

大切にしまごころタイム



学校・地域の実態

本校校区は安八郡の最南端にあり、東と南は大樽川を隔てて海津市と、西は揖斐川を挟んで養老町と、北は町内の福東地区と大敷地区に接しています。校区は南北約六キロメートル、東西約四キロメートルあり、八つの地域から成っています。

本曾三川の三角州に発達した海抜わずか三メートルほどの低湿な土地で、古来水との闘いを続けてきた輪中地帯です。近來は河川の改修、用排水施設、土地改良の事業が進み、県内有数の穀倉地帯となりました。



学校田から見た本校校舎

本校は明治六年、「騶虞」「崇文」という二つの小学校が起源で、明治三十六年に現在の校名となり、三十八年に現在地に学校が誕生しました。開校以来の校訓「まごころ」のもと、学校の教育目標「広い心を持ち、豊かに表現できる子」を育むため、校内研究に生活科と総合的な学習の時間を取り上げ、研究実践を積み重ねています。

生活科や総合的な学習の時間の学習は他教科では得られない体験や活動を通して感動を生み、協働して探求し解決していく力、人として必要な力を育むと確信しています。

こつした取組の中で、郷土を誇り、愛せる心を培い、自分を支えてくれる多くの人々に関わる喜びを実感することは、今後の健やかな成長に不可欠だと考え実践を続けています。

学び合おう 五感を生かし

昨年度より総合的な学習の時間を校訓に合わせ「まごころタイム」と名付けました。「学び合おう 五感を生かして 心の高鳴り 論じ合おう」を合言葉に、心と身体で感じ、仲間や地域の方と共に学びを深め、新しい自分に出会う喜びを味わうことができる時間。これが本校が目指す「まごころタイム」の姿です。

これまでの研究で本校児童は、作る・育てる・取材するなど体験活動には「できる喜びを」感じてひたむきに取り組むことができ、情報発信する様々な方法も身に付きつつあ



正門から見た本校校舎

ります。

三年生は輪之内町の特産品である懸崖菊を学習素材にしています。

懸崖菊組合の方と出会い、輪之内町は県内有数の懸崖菊の産地であることを知りました。懸崖菊を育てることのできるさとへの愛着と命を愛でる気持ちを育みたいと考えました。



3年生学習素材
輪之内町特産品の懸崖菊3年

人に憧れ 未来の自分の糧に

毎日の水やり、芽つまみ、現場取材等組合の方との関わりを積み上げることに菊への愛着と組合の方への憧れが深まっていきました。この思いの深まりが家族をはじめ、より多くの人に広め、さらに発展させたいという願いにつながりました。

人と関わり、生き方を学ぶことで新しい自分の発見とこれからの自分を考える大きな糧となりました。



組合の方の説明

四年生は川の歴史や環境について学んでいます。水との闘いの歴史、現在の状況や環境保全のための取組を現場に足を運んで自分の目で確かめたり、関わりのある方から話を聞いたりして学習を進めています。マインドマップをもとに自分たちで考えることを考えています。

学びの成果を還元

五年生は伝統的に「アイガモ農法による無農薬米」の栽培をメイン活動にしています。



JA職員を招いて

社会科で学んだ知識をもとにして農協や地域の農家の方から無農薬有機栽培のよさを学び、実際に米作りを行っています。活動開始時には「お世話になりますの会」を開き、一年間の活動協力依頼を子どもたち自らがしています。

毎年十一月に実施している「いなほ祭り」では栽培の過程と活動をやり遂げた思いをプレゼンテーションに込めて保護者や地域の方々に発信すると共に、穫れたての新米でおいざりを作り、五百人以上に味わっていただいています。子どもたちの学びを、食を通して還元しています。

人への共感・地域の方の思い

活動が深まるほど子どもたちの地域や支えてくださる人々への憧れや共感も深まりました。三年児童の活動中の振り返りノートの一部を紹介します。

お話を聞いて〇〇さんの大ファンになりました。五十年以上続けているのはすごいと思ったからです。生きている内の半分以上、懸崖菊を育てているからです。どれだけ懸崖菊を愛しているのか分かりました。私も〇〇さんに似ていると思いました。〇〇さんは水やりは苦労だけよい菊ができると苦労も楽しみに変わると話されました。私もピアノの練習は苦労だけ上手に演奏できると苦労を忘れてしまうからです。

活動を支えてくださった懸崖菊組合長さんからは

大人になって全国や世界に羽ばたいた時に懸崖菊について語れる人になってほしい。この経験がふるさとを愛する気持ちにつながり、宝の体験になると信じている。ふるさとを誇りに思える人になってほしい。

という言葉をいただいています。

大輪の「学びの花」を咲かせる

「まごころタイム」を支えてくださる方々は、ふるさとを支え、文化を守り育てている方でもあります。感謝の思いを還元したいと、三年生は「懸崖菊未来プロジェクト」で町中に出向いて市場調査をし、その結果を踏まえてピーアル方法や販売方法を懸崖菊組合の方々に提案しました。このように、学習を通して多くの人と関わることで憧れが生まれ、支えてもらってありがたの気持ちがこみあげ、自分たちができることを考え、実践しています。

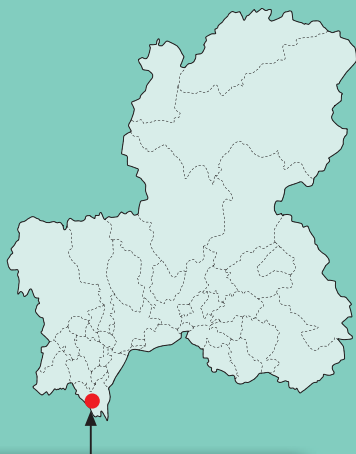


体験に勝るものなし

「まごころタイム」を充実させることでふるさと仁木、我が町輪之内を大好きになる子が増えると感じ、一つ一つの活動を積み上げ、学びの大輪を咲かせたいと考えています。

学校林保全活動を通して育む

ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

本校は岐阜県の南端に位置し、西は養老山脈、東は揖斐川をひかえた扇状地の山際に建てられています。共に創立六十一年の城山中学校と養南中学校が、平成二十年四月に統合され城南中学校となり、今年で開校七年目を迎えます。生徒数は二百三十七名、九学級の中規模校です。

さらに、平成二十八年度には、南部にある南濃中学校と統合し、新しい城南中学校がスタートします。現在、新校舎建設が進められています。周囲は田畑が多く、山の斜面や温暖な気候を利用したみかんや柿等の果樹栽培が盛んです。また、古墳や貝塚、寺院などの歴史遺産も多くあります。

学校林の歴史

森林保全活動は、戦後の国土復興



仲間と共に学校林保全活動

運動として、森林の確保、公共福祉への寄与など教育上重要なものとして推進されてきました。地元の駒野・奥条入会財産区の管理する山林を、「造林と森林資源の培養、立木の所有」を目的として地元の旧制中学校等と貸借契約を結んだのが始まりです。○昭和二十二年四月

学校改革により新制中学校が作ら

れることになり、城山村にも城山中学校が誕生しました。

○昭和二十二、二十三年頃

城南中学校や地元の新制高校等に、学校林を分けなしました。財産区の山の奥の方を、城南中学校分の学校林として貸与されました。

【契約内容】

所在地：南濃町駒野奥条入会字 西谷中尾七十番地ノ内
面積：約四千平方メートル
これ以降、森林保全活動は約六十年にわたり、城南中学校（城南中学校）の行事として位置付けられ、現在まで続いています。

学校林保全活動での学び

毎年、十月末に学校林保全活動が行われます。一年生全員（総合的な学習との関わりから）と、指導者として財産区の代表者、地域ボランティア、市役所の農林振興課の方、そして一年生保護者の方々、学校職員等約百名が参加します。

この、学校林保全活動のめあては、①「南濃町の自然の豊かさを体験し、森林の大切さを知る」②「ふるさとを知り、ふるさとを守り、ふるさとを愛する心を育む」ことです。

実際に山に行く前に、事前学習と



城南中学校の全景



枝打ち体験

学校林での枝打ち、間伐体験

この日は、弁当・水筒を持って、ジャージに軍手・ヘルメットのいでたちで、学校から三千メートルほど離れた空き地に八時四十五分に集合し、出発式を行います。九時十五分には、山道の入り口に到着して登山開始。学校林までは、急斜面の道なき道を登り、谷川を渡り、山の奥へと一歩一歩進んでいきます。十時過ぎには、目的地の学校林に到着。財産区の代表者の方から、作業の説明と注意等を聞いてから活動を始めます。

へ枝打ち・間伐のポイントへ

- ・間伐することで太い木が育ち、太陽の光も届くようになる。
- ・木が若いうちに枝打ちをすることで節が巻き込まれ、きれいな材木がとれる。
- ・人に当たらないよう、木を倒す向きに気を付ける。石を落とさないようにする。



間伐体験

生徒たちは十人程度のグループに分かれて、財産区の人が持ってきてくださったのこぎりや斧を交替で使います。急な斜面での慣れない作業に、生徒たちは悪戦苦闘しますが、地域ボランティアの指導の下、だんだんとコツをつかんで、枝を打ち、木を倒していきます。

約一時間半ほどの作業を終えたところで、昼食タイムです。枝打ちや間伐が終わって、少し日当たりもよくなり、明るさも増しました。作業

【生徒の感想】

枝打ちや間伐は初めての体験で、急な斜面での作業はとても大変でした。それに、山に登るのも初めてでした。こんなに山の近くに住んでいるのに、山について何も知らないことに改めて気付きました。のこぎりや斧を使うのは難しかったです。山の空気はとてもいい気持ちでした。



ふるさとへの愛着を込めて

自分たちのふるさとを知るとも貴重な体験ができたと思います。自然豊かなこのふるさとを大切にしていきたいと思いました。

今後の学校林保全活動に向けて

【財産区代表 桑原さんの言葉】

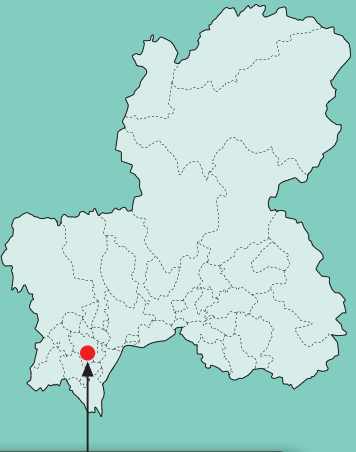
第二次世界大戦が終わって間もなく、「木材は貴重な資源、中学校の子どもたちにも林業の大切さを理解してほしい。先輩から後輩へ受け継がれた木が学校建築の際に役に立てばいいそう素晴らしい」そんな地域の人の願いから学校林が誕生したと聞いています。

現在、森林は木材生産のほかに環境保全の役割が強く求められるようになりました。私たちの周りのきれいな空気やおいしい水は森林のおかげです。適切な管理をすれば土砂災害も防ぐことができます。その意味でも、ふるさとの森林を大切にしていきたいものです。

地域ボランティアの人たちと共に、森林保全活動を引き継いでいくことによって、自分たちのふるさとを守ろうという誇りと愛着を、生徒たちの心に育んでいきたいと思っています。

県立大垣東高等学校

湧水環境とハリヨを通して育む
ふるさとへの誇りと愛着
「地域の宝物」の保全を目指して



学校・地域の実態

本校は、昭和四十九年に全日制普通
通科高等学校として創設され、昨年
四十年を迎えました。また、平成十
七年には新たに理数科を設置し、今
年で十年目となりました。

本校が位置する大垣市を含め、西
濃地方は昔より湧水の豊富な地域と
して有名です。養老山地により形成
された数多くの扇状地を由来とする
伏流水が、かつてはこの地域でも豊
富に湧き、たくさんの方々の生活の
息環境と、人々の生活を支えてきま
した。しかしながら、近年では、開
発や護岸工事等の影響で湧水の湧き
出し口がふさがれ、湧水地は激減し
ました。そしてまた、人々の生活の
変化に伴い水質の悪化等もおり、
かつての湧水環境は大きく失われて
しまいました。

「地域の宝物」ハリヨ

淡水魚の「ハリヨ」は、トゲウオ
科イトヨ属の魚で、夏でも水温が二
十℃を超えない場所では生息する
ことができます。にも関わらず、

この西濃地方でハリヨが生息でき
たのは、湧水が豊富であったことに
他なりません。しかし近年では、先
述べたような湧水環境の変化により
、住む場所を失い、絶滅の危機に立
たされており、現在ではこの西濃地
方と滋賀県にしか生息（天然分布）
していない希少な生物となっています。

理数科の歩みとハリヨ研究

理数科設置一年目に、ハリヨ研究
の第一人者である岐阜経済大学の森
誠一教授をお招きし、淡水魚ハリヨ
についての講座を開催しました。こ
れを起点として、毎年、海津市南濃
町津屋地区清水池（平成二十四年九

- 住 所／〒503-0857
大垣市美和町1784
- 電 話／0584-81-2331
- メール／c27363@gifu-net.ed.jp
- H P／school.gifu-net.ed.jp/ogkhigasi-hs/
- 生徒数／948名（H26.5.1）
- 学級数／24学級



正門付近から見た南舎と北舎

トしました。

理数科一年生のハリヨ研修では、
森教授よりご指導いただき、西濃地
方の環境やハリヨをはじめとするた
くさんの生物たちについて、学び考
えるたいへんよい機会となっていま
す。多くの生徒たちはハリヨとい
う魚が西濃地方に生息することは知
っていても、その存在が今ではどれ
ほど希少なものとなっているかをあ
まり知りません。また、湧水の環境
と共に、昔は人々の生活の中に当
たり前に存在していた生物であつた
こともほとんど知りません。この研
修を通し、生徒たちは、自分たちの住



理数科1年生全員での清水池研修（ハリヨ研
修）森教授より講義していただき、地形や湧
水、ハリヨについてなど、たくさんの方と
学ぶ機会となっている

この西濃地方に、とても大切な宝物
があることを学びます。

「私は、ハリヨが住む池でも、地域
の方はその池を利用していると知り
、驚きました。だからハリヨを守る
といつても、ハリヨだけを見るので
はなく、周辺のすべての環境を考
えて、共生するというのが大切な
のだと思います。」（九期生の感想より）

さらにこの研修では、継続研究
班「ハリヨ班」の毎年の調査報告を
まとめたリーフレットを、地域の皆
方へ配布し、清水池の現状を広く知
っていたく活動もしています。地域
の方との交流を大切にするよい機
会であり、また、たくさんの方に情
報を共有していただくことで、生徒



地域の皆様へのリーフレット配布。一軒一軒訪ね、受
け取っていただく。「がんばってね」というありがたい
お声かけをいただくこともある

ちにとつても、共に地域を守る気持
ちの育成につながっています。

「ハリヨ班」の活動と湧水環境 とハリヨの保全に向けて

継続研究班「ハリヨ班」は、平成
十八年よりこれまで、清水池周辺に
生息するハリヨの個体数変動の調査
を中心に、ハリヨの生態及び生息環
境に関するいろいろな研究をしてい
ます。研究の主な動機は、生徒たち
の純粋な「科学的探究心」によるも
のですが、研究を進めるにつれ、こ
の研究が湧水環境とハリヨを守る活
動につながってほしいと考えるよう
になっており、地域社会の一員とし
て成長しています。



岐阜市の「水環境ワークショップ」での発表の様子。
西濃地方以外の方、外国の方も参加されている場で、
ハリヨについて報告した

ハリヨ班の活動は、調査・研究だ
けではなく、その研究結果を外部に
向けても発表しています。これまで
に生物多様性条約第十回締結国会議
（COP10）等、多くの発表の機
会をいただきました。平成二十五
年には岐阜市の水環境ワークショップ
と、大阪で開催された淡水魚保全シ
ンポジウム淀川大会にて発表しまし
た。生徒は「ハリヨを知らない地域
の方々にハリヨについて説明するこ
との難しさを知った」と語りつつ、
「もっと多くの情報を伝える機会や
方法が必要だ」とも語っています。
平成二十六年には、海津市と森教
授のすすめで、海津市の小学生たち
にハリヨや清水池について教える体



「淡水魚保全シンポジウム淀川大会」でのポスター発表
の様子。全国の淡水魚研究専門の大学・高校の先生方
や、他県の高校生と交流した

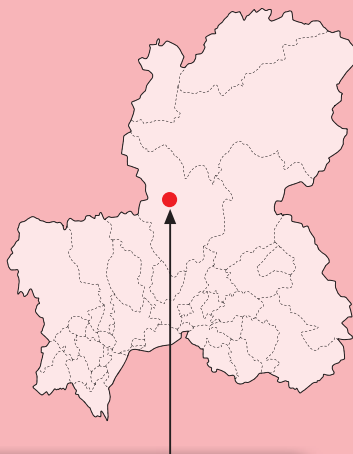


海津市の小学生にハリヨと清水池について説明する生
徒たち。小学生に、ハリヨにより興味をもってもらう
よい機会となった

験学習の機会をいただき、生徒たち
は自作の説明用紙芝居を手に説明を
するとともに、水中の生物を観察す
るなどの活動を行いました。さらに
、十月には大垣市主催の湧水保全フ
ォーラム全国大会inおおがきにて発表し
、この中で生徒は「今後も自分たち
の目でハリヨを見守り、多くの方
々に情報をお伝えしたい。そして、
ゆくゆくはこの研究が、ハリヨや湧
水環境の保全につながるものとな
ってほしい」と語りました。
これからも、次世代を担う者とし
て地域の皆様と協力しながら活動
を続け、そして、地域の宝物を守
り愛する人へと大きく成長してい
くことを願っています。

郡上市立大和第一北小学校

ホタルの飼育を通して育む
ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

校区である大和町万場区は、全戸数二百五十余り。南北四キロメートル、東西一キロメートル程で、東の長良川と西の東海北陸自動車道に囲まれた地域です。田畑が多く自然環境に恵まれています。

学校に隣接するほたるの里公園、地域の方が守り続ける七神社、町内



万場の梨園を見学する児童

にある古今伝授の里等、地域学習の素材に恵まれています。また、学校東側には長良川に注ぐ寺川が流れ、夏にはホタルが飛び交う風景が見られます。また、田畑の他にも、水はけのよい傾斜地であることを生かした梨畑が広がり、甘い大和の梨は特産物です。

保護者、地域の方は、ふるさとを誇りに思い、地域のひととの触れ合いを大切に活動をしてほしいという願いをもっており、学校の教育活動にも大変協力的です。

大和第一北小学校は、平成元年度に大和第一北小学校から校名を変更して新校舎への移転をしました。通学距離は最大二キロメートルで、全員が徒歩で通学しています。

全校児童数が六十一名の小規模校であり、一年生から六年生までの異学年グループでの縦割りの掃除や遊びを通して、思いやりの心を育んでいます。

ます。

毎年、八月十七日には七社の一つである秋葉神社を祀り夏祭りが行われたり、小学校の運動会を区民運動会と合同開催したりと保護者と地域住民が一体となって教育活動を支えています。

地域ぐるみで守る万場のホタル

第一北小学校の隣には、「郡上大和ほたるの里公園」が平成十七年に整備されました。公園整備にあたっては、設計段階から、地域住民の声だけでなく、児童の意見も取り入れられ、万場区民みんなの思いを反映さ



現在の校舎は平成元年に建てられ、その時に校名も「大和第一北小学校」に変更されました

せたものとなりました。また、整備工事でも、児童が地域住民と共に参加して

んなで作りあげました。園内には飼育・研修用施設「蛍光館」も隣接されています。「ホタルがいっぱい飛び交う美しい万場の自然をいつまでも守りたい」との願いが現在も受け継がれ、子どもたちがホタルの飼育活動や学習に取り組んでいます。

飼育については、万場のホタルを地域の中心となって守ってきた地域住民の小保田捨義さんに教えていただいています。小保田さんは、平成二年頃から万場のホタルを守ってきた地域の中心人物であり、現在も「ホタルおじさん」と子どもたちから呼ばれ、慕われています。

ぼくらで守る万場のホタル

飼育活動を担うのは、三年生の児童です。一年間の飼育活動の概要について前年度末に上級生から引継を受け、飼育活動が始まります。

春、卵からかえった幼虫の観察をします。ホタルのえさとなるカワニナをつかまえることも大切な仕事です。カワニナは、ほたるの里公園内を流れる小川や、学校周辺の寺川にも生息しています。



地域講師に教えてもらいながらホタルの幼虫にえさをあげる

幼虫は、蛍光館内で飼育されていますが、三年生はホタル当番を決め、休み時間等を活用して当番活動をしています。常時、エアポンプで新鮮な酸素を送られた、きれいな水のも

とで生活します。

「幼虫にはとげがある」

「幼虫にはえらがある。だから、水中でも生きられるんだね」

「幼虫は、六回脱皮してだんだん大きくなるんだよ」

観察活動を通して子どもたちはホタルへの関心や理解をどんどん深めていきます。

初夏、水中で暮らしていた幼虫は、水から上がり土の中にもぐってさなぎになります。成虫への変態の準備です。

「そろそろ上陸の準備を始めよう」

ホタルおじさんこと、小保田さんに教えてもらいながら、幼虫が上陸できるように水槽の準備を行います。

ここで子どもたちは、全ての幼虫が成虫になることができない厳しさを知ります。

「百匹の幼虫がいても、そのうち三匹しか成虫になれない」

「ホタルの幼虫は、川魚やザリガニ、ヤゴ、ヒルなどの天敵に食べられたり、死んでしまったりする。成虫になってもクモ等に食べられてしまう」

「万場のホタルが、ずっと元気でいられますように…」その願いをみ

んなに伝える機会が、ホタル観察会です。

ホタル観察会

毎年、ホタルが飛び始める六月半ばに、地域の方も招いてホタル観察会を行います。体育館にて、ホタル学習を通して学んできたことを三年生がクイズ形式で発表し、小保田さんの話をお聞きし、その後、ホタルの観察に出かけます。



ホタル観察会で「ホタル宣言」を発表する3年生

捕獲、産卵

観察会後、産卵を目的とした捕獲を行い、来シーズンに備えます。

美しい自然を守るのは
ぼくたち一人一人

「ホタルは、きれいな水にしか生きられません。ホタルの幼虫のえさ



地域を流れる寺川は、ホタルがすみやすい環境であるか、水の透明度を調べる児童

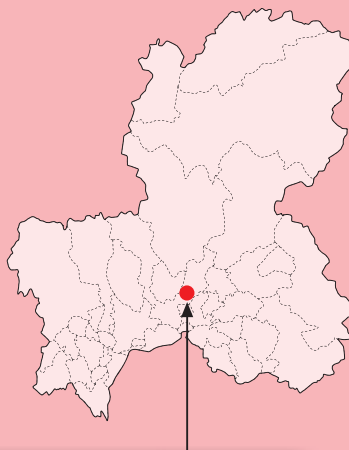
になるカワニナが、きれいな水にしか生きられないからです」これは、ホタル観察会での三年生の子どものちの言葉です。ホタルが元気に生き続けるためには、自然を守り続けることが重要であり、私たちがその責任を担っていると実感した子どもたち。

「地域を流れる寺川は、ホタルがすみやすい環境なのだろうか？」

寺川の水を汲みとり、じっと見つめ、細長い筒に注ぎ、透明度を調べる姿。きれいな川を守るために①こみを捨てない

②汚れたものを川に流さない
③川の生き物を大切に
万場の豊かな自然を守るために、自分たちができることを具体的に考え、歩み始めた子どもたちです。

身近な自然を活用して
ふるさとへの誇りと愛着を育む



学校・地域の実態

本校は、岐阜県関市の東部山間部に位置します。校庭に接して流れる津保川は、常に清らかな流れを保ち、豊かな自然に恵まれています。平成の元号が定まった時、校区の平成（へなり）の認知が全国的に高まり、道の駅平成は、現在も多くの観光客でにぎわい、夏の津保川は多くの鮎釣り人が訪れます。

校区内には鎌倉時代に建立された国の重要文化財「多宝塔」を有する日龍峰寺（高澤観音）をはじめ、多くの寺社が現存し、乳岩やお宮の清水等随所に伝説と共に名所が残っています。また、日本の人口重心地も校区内に認定されています。

学校の教育目標「求め 鍛え やりぬく生徒」のもと、素直で明るい生徒が「自治」を合言葉に、生徒会活動を基盤にして自信と誇りの獲得

を目指しています。

近年、生徒数の減少に伴い、学校は小規模化し、平成二十八年度には上之保中学校との再編により、新中学校としてのスタートを控えています。



毎年、卒業を目前に行われる「地域の大人と語る会」

「地域を知る」・「地域と関わる」・「地域を考える」学習

本校では、地域に根ざした夢と感動を生み出す学校づくりを目指し、「地域の豊かな自然や人・文化」等を活用した地域学習に取り組んでいます。地域を愛し、地域を担う生徒の育成及び自信と誇りをもって活動できる生徒の育成は、小規模校であるがゆえに地域・保護者の強い願いとなっています。

総合的な学習の時間を活用し、一年生では「地域を知る」、二年生では「地域と関わる」、三年生では「地域

を考える」をテーマに地域学習を積み重ねています。

三年間の学習のまとめとして、「地域の将来のために何をなすべきか」のテーマのもとに『武儀中学校がやがや会議』と称する地域行政へ提言をする会を開催し、自分たちが感じ、発見した武儀地域の自然環境の魅力をともに地域の活性化に向けてのアイデアを発表してきています。

中学生の提言は「地域の将来を担う大切な人材による率直で柔軟性に富んだ考え」として、武儀地域委員会や青少年健全育成推進会議主催の「ふるさとへの推進わいわい会議」



森林と清流に囲まれた武儀中学校

「地域の大人と語る会」「武儀のつどい」といった各種地域会議で取り上げられ、実現がはかれるようになってきました。

身近な自然と地域人材に
支えられる体験活動の充実

椎茸教室（一年）

武儀地域は椎茸の原木栽培が盛んであり、地域の活性化のために、椎茸を活かしたグルメやクッキー等スナック菓子の開発が積極的に行われています。椎茸振興会の支援のもと、椎茸の栄養価値についての学習やその栽培体験を通して、地域を知る学習を進めています。



椎茸教室

活動は年々発展し、武儀活性化商品（椎茸、鮎等を食材としたグルメ）の開発を夢見た調理実習の実施等大変意欲的な姿が生まれています。

また、地域の農業を学ぶ椎茸教室や野菜づくりの取組は、給食への地産食材の導入及び生産者との会食等へと発展してきています。

森林教室（一年）

武儀地域の面積のほぼ九割が森林です。森林組合の方の指導のもと、森林についての学習と測量、伐採、枝打ち等の林業体験を行っています。生徒たちは新鮮な森林の空気に感動し、初めて経験するチェーンソーワークや木登りに目を輝かせて取り組めます。自然災害との関わりや森林の



森林教室

恩恵について理解を深め、森林を守っていくことの大切さを学んでいます。

津保川鮎漁（三年）

学校の敷地は津保川に隣接しています。津保川はアシメドジョウやヨシノボリなどが棲息し、毎夏、多くの鮎釣り客でにぎわう清流です。



津保川鮎漁

二年前から津保川漁業協同組合の協力を得て、七月に鮎の友釣り漁体験を実施しています。

その体験の面白さと共に津保川への関心を高めています。

ふるさとへの自然のよさを
再発見する体験活動

三重県答志島漁村体験学習（二年）
森林に囲まれた地域のよさを再発

見することをねらいに、四方を海に囲まれ漁業で生計を立てている答志島での宿泊体験学習を行っています。漁師や島民との交流を通して、互いの暮らしのすばらしさを発見し、「ふるさと武儀」を意識する活動になっています。

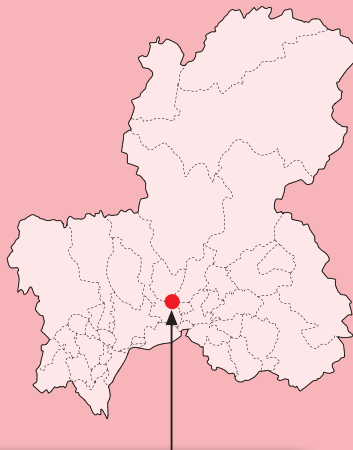
「新中学校の校章には、椎茸と森がデザインされるといいな」そんな生徒の声を聞きました。統合する上之保中学校では、柚子や茶の栽培活動を活かした学習が展開されています。地域の身近な自然を活用し、地域の特産品に関わっていくふるさと学習を今後さらに発展充実させていきたいと考えています。



答志島漁村体験

県立中濃特別支援学校

ふるさとの里山を活かした
「山歩き」で心も体も健やかに



学校・地域の実態

本校は、昭和四十二年、精神薄弱児施設向山学園の開設と同時に、施設内特殊学級として設置されたことを淵源とします。校名は、関市立倉知小学校・緑ヶ丘中学校 向山分教室でした。昭和五十三年には、県立中濃養護学校として設置されました。平成三年、高等部が設置され、平成十九年に県立中濃特別支援学校と改名され、現在に至る知的障がい者を対象とした特別支援学校です。



児童の卒業制作



四季折々の里山
新緑の中を歩く新入生

関市桐ヶ丘周辺は、本校をはじめ、岐阜県立関特別支援学校、関市立関商工高等学校、中部学院大学、関市立南ヶ丘小学校、関市立南ヶ丘保育園及び、岐阜県立ひまわりの丘第一学園や岐阜県立ひまわりの丘第二、四学園などが集積する、いわば学園の丘です。また、本校の南一キロメートルには標高三百三メートルの向山があり、中腹はかつて松茸林であったようで赤松を中心とした林が広がっています。現在は、遷移が進んで陰樹も多く見られる雑木林です。

山歩きの様子

また、林道の他に数本の登山コースがあり、四季を通じて山歩きに適した環境を提供してくれています。

本校は、「いろいろな人とかかわり、地域で豊かに生活する力を育てる」を教育目標と掲げ、その柱の一つを「健康な心と体を育てる」としています。学校設置から今に至るまで、学校近隣の雑木林の「山歩き」を、地域の豊かな自然環境を活かし「健康な心と体づくり」を実現するために取り組み、本校の特色の一つとして位置付けています。ゆったり歩ける林道のコースをはじめ、手について



小川の石を伝いわたる児童たち



桜のつぼみと校舎

た落ち葉等を持ち帰り作品を作ります。冬は、白い息が朝陽に輝きます。小学部では、各学年・学級で、年間を通して週一回、生活単元学習の二・三単位時間を使って、山歩きを行っています。また、地域の関市立南ヶ丘小学校との交流として、学年ごとに一緒に山歩きを行っています。



夏の小山で遊ぶ児童たち

中学部では、五月にみのかも健康の森へ遠足に出かけ、グループに分かれて山登りに挑戦します。体力作りのために、四月の生活単元学習の授業の中で、山歩き活動を行っています。高等部では、自立活動、生活単元学習、体育の時間に、障がいの状況に応じた学年またはグループ別に年間三〜十回程度の山歩き活

歩きの効果

今年度、夏季校内職員研修において、先端脳科学による「歩きの効果」について学び、「山歩き」の重要性を再認識しました。

動を行っています。特に、「豊かな情操を育て、体力の向上を図り、生涯にわたる健康で安全な生活ができる生徒を育てる」という教育目標に沿って、より職業生活を意識して取り組んでいます。

東邦大学 有田秀穂教授によると、歩く行為に集中すると、大脳前頭前野の「セレトニン神経」が活性化します。それにより、①嫌なこと等を受け流すことができ、爽快な気分に変わります②痛みにも耐えられるようになります③姿勢筋、抗重力筋にしっかりと緊張が起くるので、顔つきや肌の張り、姿勢がよくなります④自律神経に働きかけて交感神経が適度に緊張します⑤大脳皮質を変えて、クールな覚醒状態になります。

皆さんの声

児童生徒、保護者、地域の方々の声の一部を紹介します。

〈小学部の児童〉 「やまあるき

は、ともだちと、てをつないで、あそびます。やまは、てをつないで、のぼったりおりたりします。やまは、たのしいです。」

〈中学部の発語が少ない生徒〉 「やまいく?」と教師に問いながら準備をします。



急な斜面を登る生徒たち

〈高等部の生徒〉 「学級の仲間と協力して山頂にたどり着いた時の達成感はとてもよい思い出になりました。」

〈保護者〉 「我が子は山登りが大好きで、自然の中を歩くと、落ち着かないときも穏やかな気持ちになります。また、将来に向けて体力作りにも大変役立ち、山登りはとてもよい活動だと思っています。」

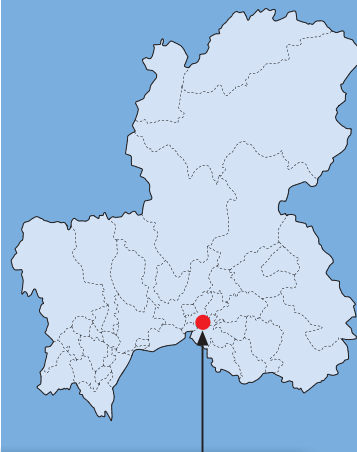
〈ひまわりの丘第一学園の園長〉 「ドングリやきれいな色の葉っぱ、

すてきな石ころ…里山のおみやげを手に、楽しそうに帰ってくる子どもたちの姿に癒されています。里山の活動が続いていくといいですね。」

すばらしい山歩き

「山歩き」は児童生徒にとって、将来の就労のための基礎体力作りになっています。特に、小学部の児童は、毎週、山歩きをすることで足腰や体幹が鍛えられ、体力や運動能力・持久力を確実に伸ばしていきます。また、友達や教師と気持ちを共有し、仲間を意識する姿が多く見られます。繰り返しのコースを歩くことが重要で、次の地形を予想して気持ちの準備をし、互いに声をかけ合っています。また、行程や時間に見通しをもつて登ることもできるようになります。自然豊かな雑木林へ学習場所を移すことにより、児童生徒は、気分転換や情緒の安定が図られています。総じて、学習活動全体により影響を生みだしていると言えます。ふるさとの里山は、これから中濃特別支援学校の児童生徒の「心と体の健康」を育み続けます。

美濃加茂市立三和小学校

ホタル保護活動を通して育む
ふるさとへの誇りと愛着

学校・地域の実態

本校は、明治四十三年に開校され、今年で百五年目を迎える歴史と伝統のある学校です。児童数は、年々減少傾向にあり複式学級もある小規模な学校です。

校区は、市北部に位置し、貴重な源氏ホタルが生息する豊かな自然と温かな人々に囲まれた地域です。山間の地域のため、一部の児童はスクールバスで通学しています。子どもたちは、保育園からずっと同じ仲間関係で、互いのよさを十分知り合い、助け合うことができています。



全校26名で行う一輪車演技

ホタル保護活動の歴史

「三和町の宝と言ったら
ホタルでしょ！」
(六年男子)

ホタルは、美濃加茂市の天然記念物に指定されています。本校がホタルの保護活動に取り組み始めて、今年で三十八年目となり、世代を超えた本校の伝統的な活動として子どもたちの自慢の一つになっています。

学校の近くを流れる川浦川、甘屋川のホタルは、ここ数年、飛翔数が



4月末のホタル幼虫放流

増え、六月には地域の方や観光客の心を和ませ、楽しめています。

地域と共にすすめる
ホタル保護活動

ホタル保護活動は、保護者、地域の方々（ゲンジボタルを守る会）の協力を得て進められています。四月と十月には、ホタル研究室で愛情をもって育てたホタルの幼虫とカワニナを放流しています。子どもたちは毎日、当番活動を行い、秋には、約千匹の幼虫を放流しています。一ミリの程の小さな点のように見える卵がやがて、約三センチ（最大）の幼虫になるまで育てています。

ふるさとの川に学ぶ活動

学校のすぐ東を流れる川浦川では、毎年、カワゲラウォッチングを行いどんな生き物が生息しているか、水質の状態はどうかを地域の講師を招いて学んでいます。子どもたちは、カワニナ、コオニヤンマ、ヒラタドリムシ等「ややきれいな川」に住む生物を見つけ、水がきれいすぎる川ではホタルの餌となるカワニナが生息できず、川浦川はホタルが育つ環境に最適であることに気付きました。そんな地域の川を保全するため、保護者も一緒になって川掃除を年間二回行っています。川に捨てられた空き缶や瓶を拾いながら、自然を守るこの大切さや環境保全活動の必要性も学んでいます。



水生生物の観察

地域の人々との触れ合い活動

地域の方から学ぶ学習の一つに、高学年の餅米作りがあります。稲刈りや脱穀、精米などを丁寧に教えていただきながら、米を作ることの難しさや愛情をもって子どものように育ててみえる作り手の気持ちなどを学んでいます。十一月には、餅つき会を行い、お世話になった地域の人々と一緒に楽しい時間を過ごし、下級生も、一緒に餅をついたり、きなこ餅を食べたりして触れ合いました。

この他にも、シイタケ栽培を低学年が学んだり、全校でアマゴを放流したりして、地域の方から学ぶ貴重な体験を積み重ねています。

地域のよさや伝統を知るふるさと教育を意図的に進めています。



5、6年稲刈り

希望のひまわり活動

本校では、「希望のひまわり」を育て始め、今年で三年目となります。初めは、少しか収穫できなかった種も昨年度は、約八万個と広がり、児童の手紙と共に地域の方々等に配布しました。今年は、学校の花壇を道路際にも作り、地域の皆さんが行き交う際に笑顔になって見ていただけるようたくさん育てました。地域の皆さんからも、元気にひまわりが咲いている写真を届けていただき、とてもうれしく思っています。

山間の地域に鮮やかな黄色いひまわりが咲き乱れ、さらに自然豊かな町になるよう全校で願っています。今後も、継続して育てていきます。



町に広がる希望のひまわり

三和の町のよさを発信する

ホタルさん、がんばってね。六月にはまた会おうね。

(一年男子)

「三和の町のよさ・素晴らしさ」はたくさんあります。ホタルの保護活動を通して、ふるさとの自然を大切にすることや地域の一員として環境保全に努めること、ふるさとのよさを伝えること等を学び合っています。そして、地域の行事に自ら積極的に参加して、地域の人々とたくさん触れ合い、関わっていく機会を意図的に設定しています。子どもたちが、学校で取り組んだ成果や学んだことを自ら発信していくよう心がけています。今年は、児童がデザインしたホタルのうちわを五百本作り、観光客に手渡しました。

ふるさと教育を通して、自分のふるさと三和を誇りに思い、周りの人に自慢できるようにたくましく育てほしいと願っています。

・ばくは、三和の町が大好きです。その理由は、山や川に囲まれた自然豊かな場所だからです。
・これからも、三和のホタルをずっと守り続けてほしいです。



豊かな自然に囲まれた校舎

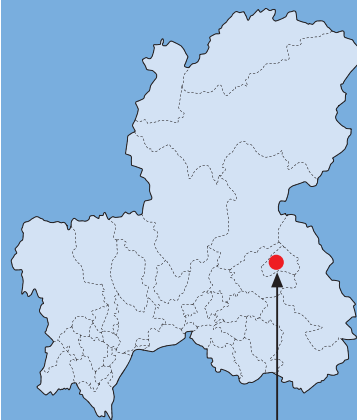
東白川村立東白川中学校

森林と水の学習を通して育む
ふるさとへの誇りと愛着

学校・地域の実態

東白川村は加茂郡の北東部に位置し、人口二千五百二十一人、世帯数八百六十五世帯（平成二十六年九月）の村です。標高千メートル前後の山に囲まれ、中央に白川が貫流しています。面積は、約八十七平方キロメートルですが、その九割以上は山林が占めています。日本の多くの山村と同様に少子高齢化が進んでいる一方で、地域の絆が大変強く、豊かな自然や歌舞伎をはじめとする地域の伝統文化が大切に守り続けられていることも大きな特徴の一つとなっています。一八六八年の神仏分離令に始まる廃仏毀釈により、仏建造物の多くが破壊され、現在まで再建が行われなかったため、国内で唯一寺のない自治体としても知られています。東白川中学校は、全校生徒七十二名、教職員十二名の小規模校です。

多種多様の野草や小鳥のさえずり、白川の水やまわりの山々の美しさ：東白川村の自然に日々感動し、そこで学ぶ子どもたちの素直で純真な姿に心を打たれます。保護者や地域も教育活動に対して大変熱心で協力的であり、まさに地域ぐるみで子どもを見守り育む体制が確立されています。



- 住所／〒509-1302 加茂郡東白川村神土647-4
- 電話／0574-78-2014
- メール／tocyu@tocyu.vill.higashishirakawa.gifu.jp
- H P／www.tocyu.vill.higashishirakawa.gifu.jp/tocyu/
- 生徒数／72名（H26.5.1）
- 学級数／3学級



東白川中学校校舎
東濃檜を多用した3階建て
本年度はランチルームに太陽光パネルと薪ストーブが設置されました

郷土を愛し、生き方を考える

総合的な学習の時間の目標を「郷土を愛し、たくましく生きる生徒の育成」とし、各学年でテーマを設けて総合的な学習に取り組んできました。一年生「環境を考える」二年生「働く人々に学ぶ」三年生「自己を見つめる」ですが、この中で特に一年生のテーマ「環境を考える」は地域の環境についての調査や体験活動を通して、自然を守る人々の思いを知り、環境を守ることの大切さを学ぶとともに、積極的に環境保全に取り組む態度を育成することをねらいとしています。これまで長期間に渡

り、地域の自然や地域の指導者と密接に関わりながら、学習を進めてきました。その関わりは昭和二十年代にはすでに始まり、中学生が村有林で学校暖房用の薪を確保していました。昭和四十五年には岐阜県初の緑化少年団が東白川中学校で結成され、植林、枝打ち、間伐等の体験学習を中心とした森林と関わる学習が四十四年も続いています。現在、村役場や森林管理署の全面的な協力を得て、緑化少年団の活動を含めた総合的な学習を行っています。学年末にはふるさと学習発表会で地域に学習の成果を伝えています。

年間の体験学習

○緑化少年団入団式＆植林体験（四月中旬）
○「白川」の水質調査（六月初旬）
○木曾檜備林見学（九月上旬）
○林業体験学習《間伐と枝打ち》（九月中旬）
地域指導者として村役場産業建設課林務商工係の方に技術指導や用具の貸し出し等多くの支援をいただいています。

また、水に関わっては樹サントリールホールディングスの協力を得て学習を進めました。



林業体験学習で枝打ちを行う
東白川村越原 越原国育林にて

体験学習に参加した生徒の声

○緑化少年団入団式・植林作業
四月十五日に緑化少年団入団式と植林作業がありました。

植林体験は初めてで、他の学校ではできない事だと思うので、とてもよい体験をすることができ、よかったです。植林作業では、とても急な斜面で、あまり使うことがない道具を使つての作業でしたが、説明を真剣に聞き、安全に注意しながら作業ができました。すぐく力のいる大変な作業でしたが、周りの人を手伝ったり、助け合ったりして協力しながら、全部を植え切ることができてよかったです。植林をすることの大切さや、今の森林の状況等も学習しました。知らない事ばかりで、とてもためになりました。今回の体験で、感じたことや学んだことを忘れないようにしていきたいです。

植林体験の準備をしてくださった方々には、とても感謝しています。

○水質調査

（一年女子 S・M）
僕たちは、六月五日に水質調査を行いました。当日は、雨の中の活動でした。僕たちがいつも泳いでい



白川の上流と下流でとった水で水質検査の結果を比較
中津川市加子母村二ノ谷キャンプ場にて

る白川は、きれいな水が流れているので、いつまでも守っていつて欲しいと、一緒に水質調査をしたサントリールの方が話されました。昼頃には天気も回復してきたので、白川の源流に入りました。とてもきれいな水で、冷たかったです。そのまま飲みそうなくらいきれいでした。その場所よりももっと上流も見学に行きました。水温は、十一度ほどでした。川には、ヒダサンショウウオという生物もいました。

このように、山・川等が美しい村ですから、これからも大切に守っていかねばいけないと思います。

（一年男子 N・S）

継続と発展

森林に囲まれる環境でありながら、身近過ぎるため実際に森林体験を授業以外でしている生徒は多くありません。それだけにこの学習を通して、地域の林業や漁業を含めた地域の自然やそこで働く人々を知り、自分たちもそこに生きているという認識を高めることができましたと考えています。

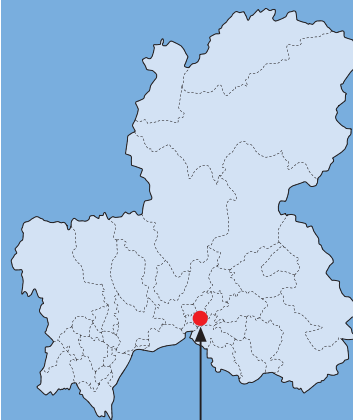
また、長い歴史を持つ東白川中学校緑化少年団ですが、その活動内容は同じことばかりをしているわけではありません。ランチルームに薪ストーブが設置されたことを機に、今まで放置していた間伐材を薪にしようという企画やサントリールホールディングスの協力により、水を育む森づくりの活動も動き出しています。

長い年月を必要とする森づくり同様、東白川中学校のふるさと学習もそれを見守るかのように継続し、そして少しずつ変化してきています。

進学、就職などで地域を離れることになっても、生徒たちは自分たちの植えた樹木を思い出し、地域と世界について考え続けていくだろうと考えています。

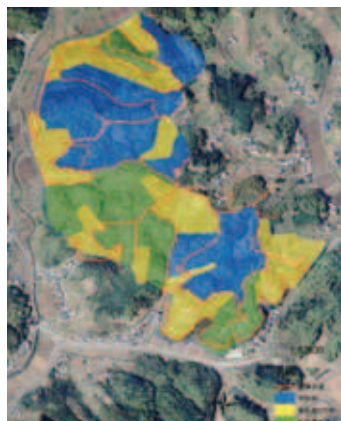
県立加茂農林高等学校

地域の里山環境は私たちから変える
「里山千年構想」への発展



学校・地域の実態

私たちの学校がある岐阜県美濃加茂市には、女優の中村玉緒さんが名誉村長を務める「日本昭和村」があり、毎日多くの人たちで賑わっています。しかし、その昭和村で困ったことが起きていたのです。実は昭和村開園のために、岐阜県が購入した山林のうち、五十ヘクタール以上の山林が利用されることなく放置されて荒れ放題となり、周辺の農家さんから多くの苦情が出ていました。特に、イノシシによる農作物への



日本昭和村未利用地区

被害は甚大で、ついに耕作放棄する田畑も出始めました。その地域の課題となっている里山にメスを入れ、様々な里山の管理方法を地域に提案することで、地域のお荷物である里山を、地域が誇れる里山とすることを目指し、活動を開始しました。



平成26年度の研究メンバー

休耕田の活用

〈目的〉

休耕田を活用し、冬季湛水・不耕起栽培にて稲作を行います。耕作放棄された田んぼに、年間を通して水を入れることで生き物を増やし、本来田んぼに生息する生き物たちを復活させながら、お米以外での現金収入を得ることを目標とします。

〈実践内容〉

日本昭和村に隣接する休耕田を見付け、利用許可の交渉をしました。山之上町「西禅寺」の住職さんからお借りすることができました。そこでモチ米の栽培とドジョウ養殖を開

始しました。

また、地域の里山環境の大切さを伝えるため、毎年夏休みを利用し、山之上小学校の児童と「田んぼの生き物の調査」も行っています。

〈実践の成果〉

私たちの水田ビオトープでは、環境省が絶滅危惧種に指定するタガメが、毎年産卵場所として利用するという成果が現れています。絶滅が危惧されている生き物たちが好む環境を復元したことで、本来の生態系回復に、一歩前進することができたと思っています。また、ドジョウ養殖三年目となる今年度は、今までの反省点を解消し、現在は順調にいらっています。



正門より加茂農林高校を望む



捕獲したコオイムシやドジョウ等の生き物たち



夏休みを利用したの生き物調査

日本ミツバチの活用

〈目的〉

昔から、日本の里山で生き延びてきた、日本ミツバチでの「養蜂」を



分蜂群を素手で触っている様子

行い、高値での取引が期待されるハチミツの生産を行います。その「養蜂の場」として、里山を継続的に活用していくことがねらいです。

〈実践内容〉

まずは、荒れた里山の整備を行います。そしてミツバチ群を捕獲し、飼育します。その後は、私たちの提案に共感し、賛同してくれる人たちにミツバチ群を譲渡し、仲間を増やします。また、逃げやすい日本ミツバチを飼育するための「逃げられない巣箱」の開発も行い、「OKーBOX」と命名します。その開発した巣箱を学校で生産し、本校林業工学科の木工製品の目玉商品として販売し

ます。

〈実践の成果〉

荒れた昭和村の里山を整備後、ミツバチの蜜源植物となる、サルスベリの植樹や、ソバの栽培を行いました。また、日本ミツバチの分蜂群の捕獲にも全力を尽くし、十二群を確保することができ、昨年度の賛同者の人たちに、ミツバチ群を譲渡することができました。

里山千年構想への発展

思えば七年前、自分たちだけで始めた「里山保全活動」は、初めは小さな一歩だったかもしれませんが。しかし、この七年間で、本当に多くの人たちの協力があつて、ようやく行政にも浸透し、地域を巻き込んで大きく発展することができ、荒れ放題であった里山が、見違えるようになりました。

地域のお荷物であった五十ヘクタールもの里山を舞台に、学校、行政、森林組合、企業などが連携し、「里山千年構想」という名称で、プロジェクトが本格的に開始しました。今年の五月には、新聞や市の広報誌等でも大きく取り上げられ、今、美濃加



記念植樹の様子

今後の発展

来年度からは「ホンモロコ」という魚の養殖を計画しています。現在地元の「みのかもちさん」と連携し、養殖場の整備を進めています。その養殖した魚を活用し、地元小学生と新たな交流を計画中です。

中津川市立下野小学校

お茶を通して育む

ふるさとへの誇りと愛着

学校・地域の実態

本校は付知川を望む河岸段丘上の風光明媚な高台に位置する、全校児童八十二名の小規模校です。保護者や地域の方は学校への愛着が強く、授業参観や懇談会・PTA行事への参加率も百パーセント近くになって

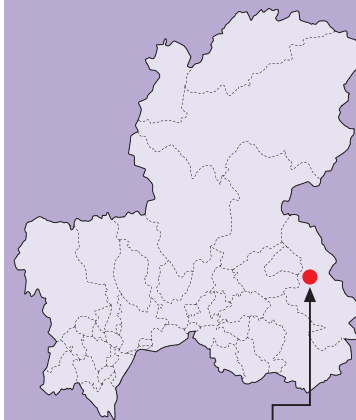


春花壇と全校児童・職員

います。また、学校の茶畑の管理や、花つくり活動へも大変協力的であり、地域で子どもを育てていこうとする意識が非常に高い地域でもあります。そんな地域の方に温かく見守られながら、子どもたちは自然豊かな環境の中で伸び伸びと成長しています。

六十年の伝統を誇るお茶栽培

本校の校門に続く通称「学校坂」の両脇には、広さ四十アールの茶畑が広がっています。栽培種はやぶきた茶と在来種の二種類です。毎年五月から七月にかけての収穫に向けて、PTAが中心となって整枝や草刈り、施肥等の作業を進めています。子どもたちが活躍するのは、五月の手摘み作業です。祖父母や保護者、職員と共に、やぶきた茶の新芽を丁寧に摘み取ります。腰にぶら下げた籠の中は、新茶の香りでいっぱい



- 住所／〒508-0202 中津川市下野664
- 電話／0573-72-2054
- メール／shimonoes@city.nakatsugawa.gifu.jp
- HP／www.city.nakatsugawa.gifu.jp/kyouiku/shimonoes/
- 児童数／82名（H26.5.1）
- 学級数／7学級



地域の方とお茶摘み作業

なります。参加者の中には、自らも小学校時代に体験された方もあり、



本校校舎と赤松

子どもたちはコツを教えてもらいながら作業をします。

また、PTA会員全員による茶葉の機械刈りも年に二回行います。機械の操作の仕方やコツは、年々新しい会員の方に引き継がれていきます。摘んだ茶葉は地元の業者の手で製茶され、それをPTAで販売しています。完全無農薬で子どもたちのまごころをこめて摘んだお茶ということで人気が高く、地元の方を中心にほぼ毎年完売します。売上金はPTA活動費の一部に充てられています。

地元の方を招いて

「新茶を味わう会」

製茶された新茶を、全校児童や地元の方に振る舞う「新茶を味わう会」を、毎年六月に開催しています。中心になって進めるのは五年生の子どもたちです。この日に向けておいしいお茶の入れ方を学んで練習したり、お茶の葉を使ったお菓子を試作したりと、参加される方に喜んでもらうと取り組みます。



「新茶を味わう会」でのおもてなし

歌は平成二十三年にPTAが中心となって制作した本校オリジナルの曲です。作詞にあたっては、子どもたちからの声を集めました。完成した歌の一番の歌詞です。

♪学校坂の両脇に黄緑のジュウタン
かけっこしながら笑い声
茶摘みの季節がやってきた
お日様パワーもらったやぶきた茶
元氣いっぱい下野のお茶♪

また、恒例の「一行詩」の発表もあります。これは、子どもたちがお茶摘みをした時の様子や気持ち等を五・七・五の詩にしたものです。こんな詩が寄せられました。

○あめのあと

ちゃばたもぼくらも

かがやいた

○ばばとのむ

下野のお茶は

かくべつだ

○下野茶で

地域の人を

お・も・て・な・し

なお、この一行詩はシールにして、



茶摘み歌「きみどりのジュウタン」を披露

販売されるお茶の袋にも貼り、地域の方にも喜ばれています。

会の最後に、参加してくださった方の感想を聞きました。地域の方は、こんな感想を話してくださいました。「とても嬉しい会でした。これからもお茶のことを愛してほしいです」「お茶入りのお菓子を、とてもおいしくいただきました」「お茶の歌が楽しく聞けました。来年もまた来たいと思います」四年生の児童は、次のような感想を述べました。「来年はぼくたちがお茶とお菓子を

作るので、楽しみにしててください」今回の会のめあて、「地域の人と仲よく思い出に残るような会にしよう」は、大成功でした。

地域とつながる子どもたち

このようなお茶を通じた活動で、子どもたちに地域とのつながりを大切にする心を育んでいます。

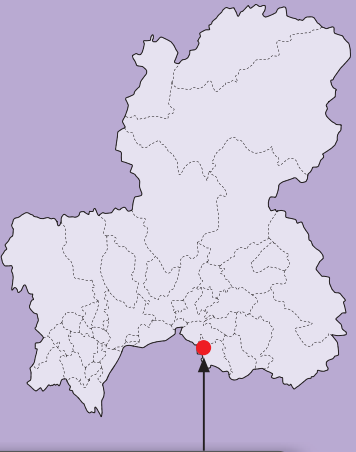
地元のお祭りやイベントへは積極的に参加する姿が見られます。またお茶と並ぶ下野小学校の特色ある活動「下野花いっぱい作戦」では、地域の方と一緒に花壇を手入れしたり自分たちの育てた花の苗を地域の方に差し上げたりするなどの交流をとても楽しみにしています。

この地域では、今後の児童数の減少が見込まれることから、他小学校との統合が進みつつあります。本校で培った地域を大切に思う心が、校区の範囲が広がっても大いに生かされることを期待しています。

多治見市立南姫中学校

ふるさとへの誇りと絆を育む

『南姫ふるさと学習』



学校・地域の実態

本校は、多治見市の西北部にあり、隣接する可児市や愛知県犬山市と松林の広がる丘陵によって隔てられた地域に位置しています。平成九年に多治見北バイパスが開通して物流経路が変化したことで、近年生徒数の減少が続ぎ、市内で二番目に小規模な中学校となっています。開校以来の伝統として、挨拶・合唱・ボラン



地域と合同で行われる南姫大運動会
今年は10回目の記念大会



『南姫ふるさと学習』の一環で育てた枝豆の収穫
をする生徒たち

ティア活動が受け継がれ、学級活動や生徒会活動に生徒が主体となって取り組んでいます。また、地域と連携した活動、小学校や保育園と連携した活動も活発です。

校区内には、旧国道沿いにある昔からの集落と丘陵地を造成してつくられた団地とが混在していますが、地域でまとまって夏祭りや清掃活動等が行われ、学校行事やPTA活動への参加も協力的です。

『南姫ふるさと学習』の開始

本校では、毎年一年生が入学すると間もなく、学校の近くに住む市原さんを講師に招き、大豆栽培についての講義を受けます。これが、総合的な学習の時間で行っている『南姫ふるさと学習』の始まりです。

前述した通り、生徒数の減少が続いてきた本校は、再び活気ある学校行事ができることを願い、十年前からは地域住民と合同で運動会を開催するなど、地域との結びつきを強くすることを求めなければなりません。また、本校の方針のひとつ「地域に貢献できる学校」にもある

- 住所／〒507-0062 多治見市大針町283-1
- 電話／0572-29-2256
- メール／j-mhime@city.tajimi.lg.jp
- H P／school.city.tajimi.lg.jp/mhime/
- 生徒数／192名（H26.5.1）
- 学級数／8学級



白壁にオレンジ色の瓦が映える校舎

ように、進んで地域に出て活動し、五年後、十年後に地域を支える一員として活躍する人材を育てることが地域からのニーズでもありました。

そこで、生徒が自然に恵まれた郷土のよさを知り、地域との絆やふるさと南姫への愛情を深めることをねらって、地域の方たちと郷土の自然から得られたものを活用して様々な体験活動をする、『南姫ふるさと学習』を行っています。

現在、大豆栽培、椎茸栽培、間伐材を利用したベンチづくり、姫川清掃活動等を、地域の方を講師として活用しながら、年間を通して取り組むカリキュラムで行っています。

育て、食するじぶらと実感

六月、市原さんに指導していただきながら畑に大豆の種を播きました。夏休みの間も、当番を決めて畑の草抜きや水やりをし、大豆が国内屈指の暑さとなる多治見の夏を乗り越えてくれるように世話をしました。

こうして育てた大豆は、十月に一部を枝豆として、十二月に大豆として収穫します。その都度、生徒たちは、市原さんや地域の方たちと一緒に、茹でて枝豆を食べたり、豆腐づくりをして食べたりします。

《大豆栽培に参加した生徒の感想》
最初は、「どうして大豆の栽培なんだろう」と思っていました。でも、夏休みに暑い中で草むしりをしたり、姫川の清掃をしたりした中で、南姫は自然に恵まれて、そのおかげで大豆をつくれることが分かってきました。自分で育てた大豆を自分の力で収穫し、それを食べるという経験ができ、とても楽しかったです。

一月になると、生徒たちは松林に囲まれた学校の環境を生かして、椎茸栽培に挑戦します。収穫した椎茸



協力して製作したベンチは、市内各施設へ
寄贈

間伐材を利用したベンチづくり

は、大豆の時と同様に、きのこ汁にし、給食時間にクラスで味わいます。こうした体験を通して、生徒たちは、枝豆、手作り豆腐、そして椎茸といった食材を育ててくれる郷土の豊かさを実感しています。

十年ほど前から、三年生が卒業を控えた二月に、間伐材を利用して、ベンチを製作し、多治見市内の公共施設へ贈呈しています。豊かな山林の広がる岐阜県の中学生として、少しでも自然を大切にするにつながらる活動をしたい、また、『南姫ふるさと学習』等でお世話になった地域へ少しでも貢献したい、という発想から始めました。

姫川リバーサイド清掃・北丘
ロードサイド清掃への参加

毎年一年生が大豆を育てている畑のすぐ横を姫川が流れています。その両脇の道路は、南姫中学校の多くの生徒が歩く通学路になっています。年二回、地域住民の方たちが出て、この姫川の清掃が行われます。

生徒たちは地域の方たちと一緒に、川沿いの草刈りや川の中のごみ拾い等を行っています。大豆が立派に育ったのは撒いた姫川の水のおかげ、「身近に水鳥が来るような川をいつもきれいに」などと言いつつ作業に取り組んでおり、身近にある郷土の自然と向き合うよい機会になっています。



川の中にも入ってごみを拾う生徒たち

ふるさと南姫のよさを感じて

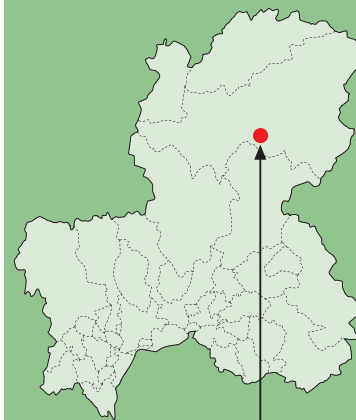
地域と合同で行う大運動会の今年のテーマは、『十年先につなぐ笑顔と絆』でした。このテーマについて、生徒の代表は、「地域との関わりや触れ合いを大切に、参加するみんなが笑顔になる大会にする」「十年経って、今度は地域の一人として帰ってこられるように」と語りました。

この言葉からも分かるように、大豆栽培も十二年目となった今年、生徒の中には故郷とのつながりを大切にしようとする心、故郷を大切に育ててきたのは、多様な体験を生徒たちに与えてくれた故郷の自然であることは言うまでもありません。

現在、生徒会では「朝ちょボラ」という毎月五のつく日に登校時にごみ拾いをする活動を提案し、日常的な環境美化に取り組み始めています。このようなふるさとの自然のために積極的に行動を起こしていくことを今後とも生徒たちと共に考え、『南姫ふるさと学習』を発展させていきたいと願っています。

高山市立宮小学校

「源流から河口まで」
ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

一之宮町は、高山市の南に位置し、宮川とその源流である位山を有する、自然豊かな地域です。春には生きびな祭りも行われ、樹齢千二百年の臥龍桜が美しく咲き、たくさんの観光客が訪れます。伝統工芸品である宮笠、まゆ雛なども有名です。

このように自然と伝統ある一之宮町の中で、宮小学校は、地域の人々



宮笠づくり見学（3年生）



臥龍桜ガイド（6年生）

との関わりを大切に郷土教育を進めています。毎年四月には、全校で臥龍桜の絵を描きます。また、六年生は、地域の方から歴史を学び、観光客を相手に、臥龍桜を守ってきた先人の思いや歴史をガイドする活動も行っています。十二月には全校で、自然、伝統、文化等を「がりゅう発表会」で地域に発信しています。

一之宮の自然
～源流探検～

一之宮町から高山市内を流れ、日本海へとつながる宮川から神通川の源流が、位山にあります。五年生はこの位山に登り、源流を探検し、自然を学んでいます。地元の方に案内してもらいながら、初めて知る位山の秘密を体感しています。五年生児童の源流新聞の一部を紹介します。

川をたどって進んでいたら、だんだん川が細くなって、水が見えなくなりました。

「川はどこに行っただろう?」と周りを見ていたら、岩の間から水の

音がしてきた。耳を近づけてみると、かすかに水の流れている音が聞こえた。他の岩の間も耳を澄ましてみると、今度はチャボチャボと水が垂れる音が聞こえた。岩の間に入っているものを取ってみたら、濡れていた水は見えていなくても、ちゃんと流れていることがわかった。

位山の源流には、白くてきれいな花・バイカオウレン、ピンクの花・カタクリ、イワナシが咲いていました。源流の水はとてもきれいなので、花も、よりきれいに咲いていました。歩く途中に、大きなイチヨウも見つけました。樹齢千年なので、根元



校庭にも美しい桜が咲きます

岩瀬小学校との交流

～宮川から神通川へ～

宮小学校からおよそ百キロメートル離れた富山市立岩瀬小学校は、神通川が日本海にそそぐ河口の町の小学校です。六月には、岩瀬小学校の五年生と毎年交流を行っています。

バスに乗って、宮川沿いを岩瀬浜へと向かいます。位山の源流と宮小学校の裏を流れる宮川で行ったCOパックテストという水質検査を道中でも行いながら、源流の水が、美しいまま富山まで流れて行っているのかを調べました。富山まで行く途中、景色の変化や川幅がだんだん広くなっていく様子、高原川との合流地点で宮川から神通川へと名前が変わっていくこと等も学びました。

川の水は、下流になるにつれて、汚れていくだろう、と子どもたちは予想していましたが、神通川下流でも、水質検査の結果から思ったよりきれいであることが分かりました。人々が川や環境を汚さない工夫をしていることにも気付くことができました。

岩瀬浜で岩瀬小学校五年生と合流し、岩瀬の町を案内してもらいま



岩瀬浜で水質検査と河口の様子を知る



バイカモの移植を力を合わせて行う

自然を守る人々の努力

～バイカモ引越作戦～

今年、一之宮町を流れる常泉寺川では橋の架け替え工事に伴い、希少な水生植物のバイカモの移植が行われることになりました。地元の保存会の方や国土交通省の方と共に、六年生がこの移植に参加しました。

一之宮町の自然や文化、歴史は、今もしっかりとつながっています。しかしそれは、たくさんの人の思いや努力で守られ、今に続いてきているということを実感できました。これからも人々との関わりの中で、子どもたちを育んでいきます。

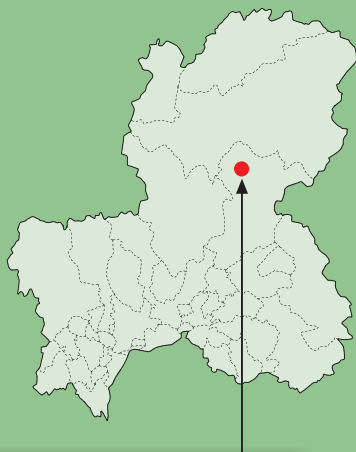


岩の下を流れる伏流水の音を聞く

下呂市立小坂中学校

自然体験を通して育む

ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

本校は下呂市の北端に位置し、海拔五百四十メートルの山間にある学校です。校区である小坂町の東端には、御嶽山の飛騨頂上（標高二千七百九十八メートル）があり、急峻な地形と豊富な雨量によって、麓を流れる小坂川の流域には、二百ヶ所余りの五メートル以上の滝があり、日本一滝の多い町として知られています。「NPO法人飛騨小坂二〇〇滝」

では、初心者から上級者まで楽しむことができる秘境滝めぐりガイドを行っており、岐阜の宝もの第一号として認定を受けています。また古くは、小坂川流域に森林鉄道が走り、林業が栄えた地域でした。

本校では、自然豊かな地域の特徴を教育にも生かし、地域の自然を体験する活動を多く取り入れ、ふるさとへの誇りや愛着を育てる教育を行っています。

野外研修

ています。

五月、新緑の美しい時期に野外研修を行います。小坂川沿いに整備されたサイクリングロード（道のほとんどもが森林鉄道の跡地）を使って、オリエンテーリングを行います。サイクリングロードは勾配が少なく、歩きやすい道で、いくつかの休憩所やトイレが設置されています。小坂中を出発し、ゴールは中川原キャンプ場です。サイクリングロード沿いには豊かな自然が広がり、数多くの樹木や草本が見られ、鳥の鳴き声が聞こえてきます。のどかな田園風景も見られます。途中には、県の天然記念物である「古子の紅梅」や「吉原桜」があります。森林や川、のどかな田園風景等、小坂の自然を満喫することが出来ます。道沿いの樹木には、木の名前が記されており、そ

- 住所／〒509-3115 下呂市小坂町長瀬466
- 電話／0576-62-2067
- メール／osaka-j@fcis.gero-j.ed.jp
- H P／www.gero-j.ed.jp/02school/each/2014/osaka-j/index.html
- 生徒数／72名（H26.5.1）
- 学級数／4学級



校舎全景

遊歩道整備

小坂町の赤沼田には、天保林があります。これは、江戸時代の天保年間に、天然のスギ、ヒノキ、サワラを植林した地です。全部で四百七十九本の植林をしたことが記録に残っています。明治、大正の頃に間伐が行われて以来、手つかずの森で、全国でも珍しい高齢の造林木です。現在は、「赤沼田天保ヒノキ群落保護林」として保護されています。この林の大ヒノキは、「森の巨人たち百選」にも選ばれています。

昨年度、中部森林管理局から、巨樹・巨木の観察環境をよりよくする

ため、天保林遊歩道整備の協力依頼を受け、森林組合や観光協会等多数の機関と協力し、この事業を行いました。

森林組合による森林教室を行ったほか、遊歩道の修理、案内標識の設置と清掃作業、破損箇所の修繕等を行いました。

小坂町に在住しながらも、貴重な林があること、散策できる遊歩道が整備されていることを知らなかった生徒たちは、遊歩道を整備しながら、大自然に触れることができました。



遊歩道の看板を新設

滝巡り

「NPO法人飛騨小坂二〇〇滝」のガイドと共に、滝巡りを行いました。ルートは滝巡り中級の濁滝コース、行程はおよそ四時間です。ガイ

ドなしでは立ち入ることのできない深い奥山に入り、濁滝を目指します。安全を確保するため、ヘルメットと簡易ハーネスを付けての山歩きです。

途中には、はしごを渡しただけの橋を渡ったり、ロープをたよりに崖の上り下りをしたり、沢を上って行ったり、スリル満点です。

途中には、高さ二十メートル近くにもなる火山灰護岸や柱状節理が見られます。また、多くの高山植物や鳥の鳴き声など、自然の豊かさを感じさせてくれます。

見られる主な滝は二つ。初めに見られるのが十メートルの滝が二段につながっている「二段の滝」です。滝のすぐ近くまで行くことができます。そして、行程の最後に見られるのが「濁滝」。高さおよそ二十七メートルをまっすぐに落ちる滝で、幅も広く、大きな音と共に、遠くまで水しぶきが飛んできます。天然のミストシャワーのようで、滝壺から十メートル以上も離れた岩場で休んでいても、ずぶぬれになるほどしぶきが飛んできました。暑い時期だったので、滝壺近くで過ごした時間は、爽快の一言でした。奥深い山と壮大な滝は、自然の雄大さを肌で感じさせてくれ

るものでした。



高さ27mの雄大な「濁滝」

枝打ち体験

小坂森林組合の協力で、「枝打ち」の体験を行いました。現在は、山の手入れを委託する山の持ち主が多く、手入れされずに放置してある森林も多いそうです。枝打ちなどの管理をしている森林と、そうでない森林を比べて見学させていただくと、一本一本の木の成長に大きな違いがあることを実際の木を見て感じる事ができました。

そして、山に入っの枝打ち作業です。比較的若い、樹高が二五メートル程度の杉の木の下部分、地表から一メートルまでの枝をのこぎりで切り落としていきます。この時、

体験活動を通して



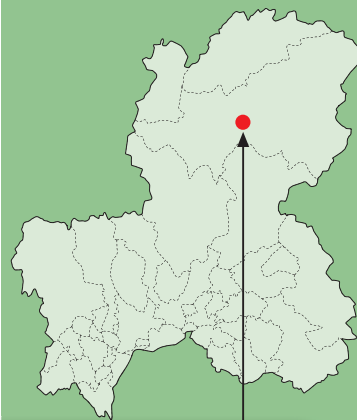
1本1本でいねいに枝打ちする

これらの体験活動を通して、生徒たちは、小坂の豊かな自然を守り、自然と共存していくための生き方を考えました。また、地域の自然と関わりながら生活している人々の生き様を通して、自分の将来の生き方を考える足場となりました。

県立飛騨高山高等学校

環境学習を通して育む

ふるさとへの誇りと愛着



学校・地域の実態

本校は、平成十七年に、高山高校、斐太農林高校が統合、併せて斐太高校通信制が移管され、「ぎふ総合型選択制高校」としてスタートを切り、本年度統合十周年を迎えます。

二校舎、三課程、四大学科を持つ、県下最大規模の学校です。「一つの学校」の中に数多くの引き出しがあり、学科の枠を超えた学習等、いろいろな可能性に挑戦することができます。北アルプスを一望できる広く美しいキャンパスで、生徒は学習や部活動に、自らの夢や目標の実現に向かって活発な活動を展開しています。

はじめに

本校では、緑豊かな飛騨の自然を知り、活用し、それを外部に伝えることでふるさとへの誇りと愛着をもった生徒を育てたいと考えています。

そこで、今回は主に山田校舎における実践を中心に記述します。

環境学習のフィールドづくり

＜里山の再生＞

本校山田校舎では平成十八年度より「美しい森づくり」と題し、校内の実習林を人と自然が共存できる、持続可能な里山にのみがえらせるプロジェクトに取り組んできました。実習林を利用目的ごとに「自然林ゾーン」「森林浴ゾーン」「特用林産物ゾーン」「木材加工生産ゾーン」「森林保育ゾーン」の五つに分けて整備



実習林内の展望台



スイス人フォレスターによる研修



高山西ⅠCでの水生生物の調査

し、環境学習を実践するためのフィールドを完成させました。

さらに安全に林内を散策できるように遊歩道の整備を行い、乗鞍岳を一望できる展望台や飛騨の伝統技術を生かしたくれ葺き屋根の東屋を完成させました。



岡本校舎



山田校舎

＜未来の森林づくり＞

実習林以外に旧清見村村有林から本校の演習林となった約十ヘクタールの演習林を所有しています。

演習林では、これまで植樹を継続的に行ってきました。平成二十三年度に森林管理署の指導の下、森林施業方法の現場検討会を行いました。

さらに平成二十五年より、スイス人のフォレスター（森林総合監理士）を演習林に招き数十年先の森林の姿を描き、安定した森林を創るアドバイスをいただいています。その経験を活かし、技術を身に付けながらよりよい森林になるように活動しています。

＜高山西ⅠCビオトープ＞

平成十九年に国土交通省と協定を結び、東海北陸自動車道高山西ⅠCに「ビオトープを維持管理しており」「飛騨の森再生プロジェクト」と題し管

理を行っています。

ビオトープでは池周辺に生えている樹木調査、水質・水生生物の調査を行い、環境の変化、生き物の生態に目を向け活動しています。

樹木ゾーン、水辺ゾーン共にその生態系は年々豊かになっています。

環境学習の実践

＜荒城農業小学校での環境学習＞

荒城農業小学校とは国府町にある地域の児童を対象に農業体験ができる学校です。山田校舎では年二回小学校を訪れ、田んぼの生き物調査と川の生き物観察会を行っており、今年で七年目を迎えます。

田んぼの生き物調査では、田んぼで見られる様々な生き物を捕まえ、そこに生息する生き物の生態を知ることによって学習します。



川の生き物観察会



海外からの観光客への説明

川の生き物観察会を、宮川の支流の荒城川で行い、清流との触れ合いを楽しみながら川の生き物を探まえ、地域の水環境の豊かさについて、感じてもらうことができました。

＜飛騨の里＞

平成二十四年度より、高山市の観光施設である、飛騨民俗村・飛騨の里の依頼を受け、飛騨の魅力を地域だけでなく、世界中の方々に発信していけるような展示を行っています。今年度は、英語での展示や説明を行いました。

ギフチョウと里山

平成二十年度から国の絶滅危惧種第Ⅱ類であるギフチョウを本校実習林のシンボルにし、里山の再生に取り組んできました。

ギフチョウをシンボルにした理由は、本校に飛来してくるのが度々確認されており、ギフチョウが多く生

息していると、里山としての自然の豊かさが認められると考えたからです。さらに、地域から興味をもってもらうことで地域と協力・連携して

周りの荒れた里山も豊かにしていくことができると考えたからです。

地域の方々と協力し、ギフチョウのエサとなるヒメカンアオイや、吸蜜植物であるコバノミツバツツジ、エドヒガンを校内に移植しました。また、ギフチョウの多く生息する地域でのギフチョウの卵調査を、国土交通省、環境アセスメントセンターと協力して行っています。



本校で飼育されたギフチョウ

地域に広まる本校の活動

ギフチョウに関する活動を行った三年生の生徒は、「いろいろな場所では本校への期待の声を聞きます。過去

の先輩たちが地道に活動してきた成果だと感じています。今後は、国際的な活動もしていきたいと考えています」と話していました。

成果と今後の課題

ギフチョウを自然環境のシンボルにすることで地域の人たちの関心を集め、地域の方々と一丸となって自然と調和した里山づくりを進めることができました。

また、里山の役割・魅力・大切さを地域に伝える活動ができ、地域の人たちの里山に対する意識改革ができました。さらに、この地域における環境教育の中心校としての期待が高まってきていると感じました。こういった活動を通して、生徒たち自身もふるさとの自然環境の豊かさを再確認することができました。そして、地域に発信し、評価を受けることで、自分たちの取組に自信をもち、ふるさとへの誇りと愛着を育んでいくことができました。ふるさとへの誇りと愛着を胸に、これからの飛騨地域を担っていく人材に育って欲しいと願っています。

平成二十六年 岐阜県ふるさと教育表彰について

「岐阜県ふるさと教育表彰」とは、児童生徒が、地域に暮らす様々な人たちの関わりを深めながら、身近にある地域の自然、歴史、文化、産業等について学び、それを受け継ぎ、発展させるとともに、地域に積極的に関わろうとする意欲や態度を育む「ふるさと教育」の実践を表彰することを通して、「ふるさと岐阜」への誇りと愛着を一層高め、地域に根ざし地域の特色を生かした教育について普及・啓発を図ることを目的としています。

対象は、県内全ての小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校で、各学校からの応募により選考されます。今年度は、公立小・中学校、県立高等学校、私立高等学校、九十四校から応募がありました。

表彰校

※受賞校を含む全ての応募校を「ふるさと教育」実践校として認定します。

校種	地区	優秀賞（小学校）	優秀賞（中学校）	奨励賞	認定校
小学校 中学校	岐阜	羽島市立桑原小学校 山県市立伊自良北小学校 瑞穂市立中小学校 北方町立北方西小学校	岐阜市立長森南中学校 本巣市立本巣中学校	岐阜市立岩小学校 山県市立伊自良南小学校 瑞穂市立南小学校 笠松町立笠松小学校 各務原市立川島中学校	13校
	西濃	大垣市立興文小学校 養老町立広幡小学校 輪之内町立仁木小学校 揖斐川町立坂内小・中学校	関ヶ原町立今須中学校	大垣市立川並小学校 大垣市立赤坂小学校 大垣市立青墓小学校 海津市立大江小学校 垂井町立垂井小学校 揖斐川町立谷汲小学校	27校
	美濃	美濃市立大矢田小学校 郡上市立大和第一北小学校 郡上市立小川小学校	関市立上之保中学校 郡上市立八幡中学校	関市立安桜小学校 郡上市立明宝中学校 郡上市立郡上東中学校	11校
	可茂	可児市立今渡南小学校 八百津町立錦津小学校 白川町立佐見小学校		可児市立土田小学校 可児市立桜ヶ丘小学校 八百津町立久田見小学校	9校
	東濃	土岐市立泉西小学校 中津川市立神坂小学校	土岐市立西陵中学校	土岐市立駄知小学校 土岐市立肥田小学校 恵那市立東野小学校 恵那市立上矢作小学校 瑞浪市立瑞浪中学校 瑞浪市立陶中学校 瑞浪市立稲津中学校 恵那市立上矢作中学校	11校
	飛騨	高山市立東小学校 高山市立久々野小学校 飛騨市立河合小学校 飛騨市立宮川小学校 下呂市立金山小学校	高山市立東山中学校	高山市立丹生川小学校 高山市立清見小学校 飛騨市立古川小学校 飛騨市立古川西小学校 下呂市立宮田小学校 高山市立松倉中学校 飛騨市立神岡中学校	13校
高等学校		県立岐阜農林高等学校 県立大垣東高等学校 県立土岐商業高等学校 県立益田清風高等学校 県立古城高等学校		県立不破高等学校 県立海津明誠高等学校 県立関高等学校 県立坂下高等学校 石井学園城南高等学校	10校
「ふるさと給食」 中学校		各務原市立那加中学校 郡上市立郡上東中学校	各務原市立桜丘中学校 高山市立清見中学校	＊マイスタープロジェクト事業「中学生学校給食選手権」におけるグランプリ及びふるさと賞を優秀賞とする。	
合計		37校（小21校、中7校、高5校、ふるさと給食4校）		37校（小23校、中9校、高5校）	94校

平成二十六年 岐阜県ふるさと教育展の様子

県内全ての公立幼稚園、小・中・高等学校、特別支援学校（教育委員会等を含む）で取り組まれている「ふるさと教育」について、取組の様子の一部を、岐阜会場と飛騨会場の二箇所展览展示し、紹介しました。



岐阜会場



岐阜会場

平成二十五年 岐阜県ふるさと教育表彰優秀賞受賞校

【小学校】

- ◆岐阜市立岐阜小学校
- ◆山県市立いわ桜小学校
- ◆海津市立石津小学校
- ◆垂井町立表佐小学校
- ◆輪之内町立仁木小学校
- ◆美濃加茂市立三和小学校
- ◆可児市立東明小学校
- ◆白川町立佐見小学校
- ◆土岐市立鶴里小学校
- ◆恵那市立武並小学校
- ◆中津川市立坂下小学校
- ◆高山市立朝日小学校
- ◆飛騨市立河合小学校

【中学校】

- ◆本巣市立根尾中学校
- ◆大垣市立星和中学校
- ◆郡上市立大和中学校
- ◆郡上市立明宝中学校
- ◆郡上市立郡上東中学校
- ◆東白川村立東白川中学校
- ◆飛騨市立山之村小・中学校

【高等学校】

- ◆岐阜県立益田清風高等学校
- ◆岐阜県立古城高等学校

【特別支援学校】

- ◆岐阜県立岐阜盲学校

■岐阜会場

期間：平成二十六年十一月一日（土）

～十一月十四日（金）

※岐阜県ふるさと教育週間

場所：岐阜県図書館

■飛騨会場

期間：平成二十六年十一月二十二日（土）

～十一月三十日（日）

会場：飛騨高山まちの博物館

岐阜県ふるさと教育表彰 優秀賞受賞校活動紹介

「ふるさと教育」の優れた事例として、平成二十五年度に「岐阜県ふるさと教育表彰優秀賞」を受賞した二十三校の取組について、児童生徒のコメントや写真入りのパネル等を展示して分かりやすく紹介しました。



岐阜会場

◆アンケートより

- ・どれも地域ならではの特色のある力作ばかりで見栄えがある。手づくり感が良い。
(岐阜会場、五十代男性)
- ・子供たちが、テーマにそって取り組む姿や勉強内容が分かりました。地域について知れば知るほどおもしろいですね。子供たちの姿が目につきました。
(岐阜会場、三十代女性)
- ・学校の誇り、ふるさとの誇り、岐阜県の誇りが感じられる展示です。こうした中身を表そうとすること、その素晴らしい心を学ぶことができると思います。ぜひ続けてほしい展示会です。
(飛騨会場、四十代男性)



岐阜会場



飛騨会場



飛騨会場

「清流の国ぎふ」ふるさと体験事業活動紹介

県教育委員会では、ふるさとの自然や文化を将来に引き継いでいく人材を育むため、今年度から『清流の国ぎふ』ふるさと体験事業を実施しており、その活動の様子を、参加者が作成した体験記録等を展示して紹介しました。



飛騨会場

◆アンケートより

- ・子どもたちや地域の方々の表情がとても生き生きしていて、見ていて楽しかったです。
(岐阜会場、二十代女性)
- ・親子で楽しみながらふるさとを学んでいらつしやる様子がほほえましく、意味あるものに感じました。
(飛騨会場、五十代女性)
- ・体験後の子どもたちの作品がとてもよかったです。
(飛騨会場、四十代女性)



岐阜会場



岐阜県観光ポスター展示

(岐阜会場のみ)

豊かな自然と文化に育まれたふるさと岐阜の魅力を再認識するため、県内の観光ポスターを掲示しました。



岐阜会場

【本書について】

本書に掲載されている実践は、「ふるさと教育」における優れた実践として、県内6地区から推薦されたものです。内容については、「ふるさと教育」の分野を、文化・自然環境・歴史・地場産業・地域コミュニティに分類し、今年度は、特に『自然環境』の分野での実践について、学校での取組を紹介しています。

本書に掲載された実践は、県内各地で行われている数多くの実践のほんの一部に過ぎませんが、各地区・各学校の「ふるさと教育」の充実のために参考になれば幸いです。

岐阜県ふるさと教育実践集

～ ふるさとへの誇りと愛着を育む ～



発行年月／平成27年2月

編集発行／岐阜県教育委員会教育総務課

〒500-8570 岐阜市藪田南2-1-1

Tel. 058-272-1111（代表）

Fax. 058-278-2812

清流の国ぎふ憲章

～ 豊かな森と清き水 世界に誇れる 我が清流の国 ～

岐阜県は、古来、山紫水明の自然に恵まれ、世界に誇る伝統と文化を育んできました。豊かな森を源とする「清流」は、県内をあまねく流れ、里や街を潤しています。そして、「心を清流」として、私たちの心の奥底にも脈々と流れ、安らぎと豊かさをもたらしています。

私たちの「清流」は、飛騨の木工芸、美濃和紙、関の刃物、東濃の陶磁器など匠の技を磨き、千有余年の歴史を誇る鵜飼などの伝統文化を育むとともに、新たな未来を創造する源になっています。

私たち岐阜県民は、「清流」の恵みに感謝し、「清流」に育まれた、自然・歴史・伝統・文化・技をふるさとの宝ものとして、活かし、伝えてまいります。

そして、人と人、自然と人との絆を深め、世代を超えた循環の中で、岐阜県の底力になり、100年、200年先の未来を築いていくため、ここに「清流の国ぎふ憲章」を定めます。

「清流の国ぎふ」に生きる私たちは、

知

清流がもたらした

自然、歴史、伝統、文化、技を知り学びます

創

ふるさとの宝ものを磨き活かし、

新たな創造と発信に努めます

伝

清流の恵みを新たな世代へと守り伝えます

平成26年1月31日 「清流の国ぎふ」づくり推進県民会議